

---

# 東方否意狼

目だま

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方否意狼

### 【Nコード】

N7842N

### 【作者名】

目だま

### 【あらすじ】

さてさて、これは一人の少年が歩む奇妙な物語。

不慮の事故を発端に過去      それも人類が生まれるよりもはるか昔へ。原因不明予測不能。第二の生はよりもよって人間ではない真つ黒な獣。

一体、彼はどうなっていくか、どんな物語を歩んでいくのか

それは、神以外、与り知らぬ話でございます。

タイトル変更。旧タイトル『東方妖狼紀』、現在のタイトルは『とうほういないおかみ』とお読み下さい。

## 注意

・これは『上海アリス幻楽団』によるゲーム『東方project』の二次創作です。

・東方キャラの設定は基本的に二次設定です。

・一度リメイクしました。設定が変わっているので注意して下さい。今度はまともだと良いなあ（願望）

・この作品は作者の勢いとノリと思いつきで構成されています。

・主人公は強キャラです。でもオリキャラはバグキャラです。そしてその内の一人（？）は最強です。

・オリキャラが出ます。むしろ最初はオリキャラしかいません。最初は東方の皮を被った何かです。

以上の点に気を付け、用法、用量を守り正しくお読みください。

## 再びなプロローグ（前書き）

皆様、お久しぶりで御座います。目だまです。

此度、黒歴史と言っても良い今作を、一から書き直すことを勝手に決意しました。本当に申し訳有りません。

変更点としては、シナリオの大幅な書き換え、あるキャラの出版の増加、オリキャラ複数追加、時系列の変更、細々とした設定の変更、etc etc。

そして物語の序盤が東方の皮を被った何かに…………。

コラボ企画に参加してるのに何やってんだと思いますが、しばらくは最優先で更新させていただきます。本当に申し訳有りません。

## 再びなプロローグ

人は孤独を嫌う。痛みを嫌がる。死を恐れる。

それは当然だと思う。

ありがちな事を言えば、どんな人でも一人では生きていけない。

別に、食べ物がどうこうとかそののではなく、単純に一人では何れ壊れてしまうと言う意味で。直接的でなくても、ネットでもゲームでも何でも構わないが、人と繋がっていようとする。それはある意味本能だと思う。知らない土地で一人で迷子になると不安になるとか、そんな感じ。

死や痛みははもつと単純だ。

死は未知だ。誰にも分からない。人にとって、未知とは何よりも恐ろしい。故に、好奇心はその未知を既知に変えようとする。そして、痛みはその先に死を連想させる。

ならば、人との繋がりを、世界との繋がりをすらも消し、痛みを十分に感じ、死に至ってしまった俺は、狂わずにいられるのだろうか。

「それで、俺はどうなるんですか？」

「何か落ち着いてないか？」

「厨二な独白したら落ち着きました」

俺がそう言っと、俺の前に立つ大男は溜め息を吐いて呆れた様な目を向けてくる。

「珍しいな、お前。こう言う事になったら、何か変な叫び声上げて喜ぶか、泣きながら発狂するかのどっちかなんだが……」

いや、それどっちも変わらないと思う。発狂は喜びの余りだろうし。

「で、詳しい説明してもらえますか？閻魔様」

何故俺が閻魔と名乗る大男と対談をしていたのか、それを説明するために俺の体感時間で数時間前まで遡ろう。

いつもの様に母親に叩き起こされ、両親と朝食を食い、迎えに来た友人二人と平凡な公立高校へ行き、いつもの様に恙無く授業を受けたその帰り道の事だ。

「あー、もう学校嫌だ。引き籠もってニートしたい……」

思いつきり猫背で、あからさまにだれてますと言う感じで歩く俺。

「あ、そう言えば、永夜抄どうだった？」

その俺の隣を歩く友人兼幼馴染

ながせそいち 流瀬宗一。背が高い、イケ

メン、頭が良い、一級フラグ建築士、鈍感と言う何処の主人公？と聞きたくなる様な奴。たまに主人公補正が付いてるんじゃないかと

本気で疑ってしまう。でも俺なんか目じゃない程のオタク。と言うか俺にそっち関係を仕込んだ奴。俗に言う残念なイケメン。なのに人気。イケメンってずるい。

「無理。ノーマルで死んだ」

「相変わらずゲーム下手だな」

余計なお世話だこの野郎。今回ののはちゃんとイージーはクリアしたんだぞ！！

「下手の横好き乙」

言い返せない自分が憎い。

「永夜抄って何ですか？」

そう言って口を挟むのは高校になって宗一の奴が面白そうだからって言う理由で俺に引き合わせた隣のクラスの女子。名前は……ごめんまだ覚えてないや。蛙と蛇の髪飾り付けてて、近所　いや隣町だっけ？まあそこら辺の神社で巫女かなんかやってるらしい。そもそも家の事情とかであんまり学校に出てこないから俺は宗一越しにしか接点が無いのだ。

「東方Projectって言って、なんだっけ上海アリス幻樂團？が出してるゲームの事だよ」

「お前にしては良く覚えてたな。簡単に言えば、敵が撃ってくる弾幕を避ける弾幕シューティングゲームって言うジャンルの同人ゲームだ。漫画とかもあるけどな」

「はあ……つまりインベーダーゲームみたいな物なんですね」

その一言に宗一が固まった。取り敢えず、ご愁傷様。

「じゃあ、俺先に帰るから」

「おう。君はちょっとこっちでOHANASHIしようか」

「え、え？私何か言いました？ちょ、流瀬君！？肩、肩痛いですって！..」

ああなつた宗一はそう簡単には止まらない。まあ、運がよければ一時間程度で開放されるだろう。俺の時は家だつて所為で夜まで行つたからなあ……。

「まつ、でも良いだろ」

俺の長年の地味キャラのカンがアイツは宗一に惚れていると告げているし、一緒にいれるのは悪い事じゃないだろ。そんな事考えながら、二人をおいて信号が青になつたのを確認し、交差点を渡る。

ゴシャッ!!

俺はこの時、初めて人の肉が潰れる音を聞いた。あまりにも突然過ぎて訳が分からないが、その音が自分から発せられた事は理解できた。視界が定まらず天と地を交互に写す。地面に何度かバウンドして、ようやく止まったと思つた次は信じられない程の激痛。痛すぎて何処が痛いのが分からない。息が苦しい。叫ぼうとしても声が



出ない。

（ああ、名前、覚えとけば良かった……）

瞼を閉じた訳でもないのに暗くなっていく視界の中で、最後に思ったのはそんな事だった。

「と、ここまでは覚えています」

「……お前、よくそこまで覚えてたな」

何処まで覚えている？と聞かれたので、多分死ぬ間際の感触や感覚までも鮮明に語ったら閻魔様にドン引きされた。

閻魔様曰く、信号無視をした2トントラックが俺に激突。ゴミ屑の様に宙を舞い、地面に叩き付けられたそうだ。その時の俺の姿は、脳漿は飛び出し内蔵は破裂し、骨は砕け皮膚を突き破り大量に出血しているスプラッタ映画も真っ青な死体だったそう。確かにそんな中で意識を保っていた俺すげえ……。

「で、別にそれが閻魔様の所為とか、そんなテンプレは無いんですよ？」

「ああ。他の神は暇潰しとかで勝手に殺す様な事例もあるが、お前は違う。アレは純然たる事故だ」

って言うか、そんなテンプレ本当にあるのか……。小説の中だけだと思っていた。

「奴ら、俺になんの断りも無く勝手にやって俺には後始末だけやらせやがる……！！特にゼウスだあのジジイ！！今年に入ってもう三回目だぞ！？地獄に叩き落してやろうかあの無能め！！」

閻魔様はストレス社会に生きているらしい。と言つか、ゼウス何やってんの？神話でも色々やらかしてたのは知ってるけど、現代でも？

「最近じゃあのスキマが神隠しまでやってるしよお……！！やつぱあそこの担当が映姫だけってのはきつかったか……」

「は、はぁ……？」

えつと……スキマ？神隠し？確かに最近行方不明者が出たのは知ってるけど、何故その二つの単語が出てくる。え？あるの？幻想郷あるの？

「つと、話が反れたな。まあ、お前の死自体に問題は無い。問題は死んだ後だ」

尋ねたい事は山ほどあるが、どうせ死んだんだから関係無いと割り切ろう。

ああ、でも宗一の奴は幻想入りとかしそうだな。それを追ってあの子も、……つとりア充爆発しろ！！……何か空しい。鬱だ死のう……あ、俺もう死んだんだ。

「おい、大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題ない」

百面相している俺を閻魔様が心配してくれる。顔怖いけど、良い人だ閻魔様。

「ならいいが……単刀直入に言うぞ。お前は世界の輪廻から外れた」

「へーそうで……す………か？」

おい、今何て言ったこの人。

「原因はお前にあった何らかの能力の暴走。恐らくだが、比較的近い平行世界に転生する事になるだろう」

「ハア！？」

俺に能力！？そんな物発動したためしがないぞ！！

「時間が無くなってきた。質問は一切認めん。お前の今世の記憶はそのままにしておく。俺も出来うる限りを尽くして探してやるが、どんな世界でも頑張って生きろ」

「ちょ、何言つて」

「時間だ」

余りの急展開に付いていけなくなった俺は閻魔様にもっと詳しい事を聞こうとするが、閻魔様の一言で光に包まれ、意識が遠退いて行く。

次に目が覚めた時には、鬱蒼と生い茂る森の中にいましたとさ。

## 狼の新しい命と生活

アルーヒ、モリノナーカー、イヌサーンニ、デアーツタ。

「いや、さすがにこれは……」

あ、ありのまま今起こった事を話すぜ！！

『閻魔様とのドキドキ死後対談の後、目を覚ますと森の中にいた』

な、何を言ってるのか、わからねーと思うが俺にもわからねー。

これだけでも十分に恐ろしいのに、さらにもう一つ。

取り敢えず、ジツとしても仕方が無いと思って立とうとしたら立てなかった。仕方なく四つん這いで歩いたんだが、妙に歩きやすいまあ、いいかと森の中を歩き続けると大きな川を見つけた。物凄く綺麗な川だ。今時こんな川もあるんだなーと感心しながら、喉の渴きを潤すために川を覗き込んだら、そこに写っていたのは、俺の顔じゃなく真っ黒な目つきの悪い犬っぽい何かの顔が映りこんでいた。

「何ぞこれ……」

リアルに頭がどうにかなりそうだ……。

何度瞬きしても、後ろを振り返っても見ても、写っているのは俺の顔ではなく犬の顔だ。いや、そもそも何故気付かなかった。

視線をすぐ下に向ければ、見えるのは肌色の見慣れた手ではなく獣っぽい真っ黒の毛に覆われた前足。顔を後に向ければ、同じく真っ黒な毛に覆われた胴体に後ろ足、更に尻尾。……あ、自分で動かせる。

「つまり、俺は人ではなく犬（？）として生を受けた、と」

正直、何でいきなり成体なのかとか、犬の体なのにどうやって声出してるんだろう、など疑問は尽きないが、今は。

「何でああーーーーーッ!!!!!!!!!!」

思いつきり叫ぼう。

取り敢えず、今の現状を確認すると、この森の中には人のおいが全くしない。むしろ獣臭い。つまり、俺はこれから野性の中で生きていかなければならん訳だ。

「どうしよう……」

川からさほど離れていない森の中、前足の爪で顔をポリポリと掻きながら悩む。

我ながらシニールな画だと思うが、誰も居ないんだ。気にする必要は無い。

体に異常は無いどころかむしろ感覚的なスペックが上がっている。嗅覚は言つに及ばず、味覚、更には気配察知まで出来る様に。視界が狭まっていないのが一番の謎だが、まあ、得をしたと考えておう。

運動性能もいくつか試したが、走る速さや体力も明らかに上昇。物

を持つ事が出来ないのは不便だが、その内考えれば良いだろう。

「問題は、飯だよな……」

こちらら今時の普通の高校生だ。狩りのやり方なんか……いや、知らない事も無いけど、動物の狩りは知らない。

だが案ずる事無かれ。

ここで何故この体が既に成体程の大きさなのか、と言う疑問に着目しよう。

普通に転生すれば、恐らくは幼い状態のはずだ。だが、俺は成体。つまり、今の状態は俗に言う憑依状態であり、上手くいけば体の持ち主の知識を使えるかもしれない、と。人間、追い込まれれば考えが浮かぶものだ和我ながら感心した。二次創作読んでよかった！じゃないと憑依なんて知らなかったし。

教えてくれた宗一に今日この時だけ感謝しつつ、目を閉じる。

闇の中に落ちていく様な、夢を見ている様な感覚の中、集中力を出来うる限り引き出し、記憶を探っていく。

そんな中で、頭に思い浮かぶ事が二つ、全く意識していないにも拘らず、口から出ていた。

「『肯定と否定を操る程度の能力』……『畏れを抱かせる程度の能力』……って」

また 東方 か ！！

「ハッ……！！？」

思わず心の中で叫んだ所為で集中力が切れてしまった。

この内のどっちかが閻魔様の言っていた輪廻から外れた理由だろう。と言うか、能力二つってありえるのか？宗一、取り敢えず電波でも

良いからお前の見解を聞かせろ……って、そんな事はどうでも良い。  
今の問題は、結局狩りの方法が分からなかったと言う事だが……。

「まあ、いざとなれば木の実でも食つか」

と言う事で結論を出した。

「何とかなるさ」

良い言葉だ。

「寿命って、何なんだろうな……」

『んなもん、こっちが知りたいッスよ。何年生きてんスカ?』

「……五十年?」

『大将、もしかして狼じゃなかったりしません?』

「俺が知りたいよ」

俺がこの森 正確には山に来て早五十年、結構なんかなる  
もんだと証明された。



この山、木は多くせに食える木の実が異様に少ない。最初の方は我慢していたがすぐに飢えてしまい、近くに居た小鹿を、殺した。初めて、自分の牙で。テレビでやっていた動物の狩りを思い出して、見よう見真似で、自らの牙で相手の首の皮を衝き破り、肉を断ち骨を砕いた。

正直、今でも得物を殺す感覚は苦手だ。肉も決して美味しいとは思えない。それでも、今まで全て食ってきた、決して残さない様に。自己満足の感情論だったが、まあ、やらないよりはマシだと思っている。

その間、当然俺自身が狙われた事もあったが、それでも約五十年、生き抜いた。その内この森の主として扱われてきたが、それが大体十年前の話だ。

今、俺が住処としているのは頂上付近にある岩で出来た穴倉。因みに、あの時の川はこの穴倉から真っ直ぐ下った麓にある。

そして、穴倉で寝転んでいる俺の顔のすぐ側に居る奴に目を向ける。

『?どうかしたんスカ大将』

「……いや、何でもない」

俺の視線に気付き、こっちに顔を向けてくるリス　　名をクルミ。名前は女の物だが、性別はオス（確めた訳じゃないが、多分そうだろう）。何故か俺の言葉を理解し、俺の事を大将と呼ぶ訳の分からん奴だ。ついでに、ずっと犬だと思っていた俺に狼だと教えた奴でもある。

こいつと会ったのは数ヶ月前、十数年の研究により使用法が判明した『畏れを抱かせる程度の能力』を使い、狩りをしていると、何故か俺に『俺を大将の僕<sup>しもへ</sup>にしてくれ!!』と言ってきた。本当に訳が分からん。

『そう言えば、大将。例の『肯定と否定を操る程度の能力』ってのは使えたんスか？』

「……まだ」

『大将にも出来ない事ってあるんスねえ……』

しみじみと言うクルミ。お前は俺を何だと思っているんだ。ただのしがない狼に何を期待してるんだよ、お前は。

話は変わるが、さつきも言った通り、『畏れを抱かせる程度の能力』の方はある程度分かつている。使い方は簡単、相手に敵意を持てばいい。それだけで、自分より格下の相手は俺を恐怖し、畏れる。自分と同等か、それ以上の相手には真正面からは効かないが、隙を突いたり、一瞬でも恐怖を覚えさせれば、発動可能だ。能力による畏れは相手の身を縛り付け、例え逃げたとしてもその畏れはその身に刻まれ続ける。と言うか、最初から意識せずに使っていたらしい。まあ、そうでもない限り、素人が最初から狩りに成功する訳が無いのだけど。『ぬら孫』の様な事が出来ないのは残念だが、狩りの時には大助かりだ。

それに対し、『肯定と否定を操る程度の能力』は全く分からん。効果も、使用方法も未だに研究中だ。  
そして、最近気にしているのが  
。

『狼って、五十年も生きるっけ？』

と言う事だ。

さつきのクルミとの会話もそこに繋がる。  
運動機能の低下も、感覚の衰えも全く無い。つまり、まだまだ老いていないのだ。五十年でまだ老いない？そんな狼いるかッ！と言う話である。

俺ですら、最近まで自分が狼である事を知らなかったのだ。なんとも言い様が無い、と言う事で考えても仕方ない事は保留。

「……腹減ったな」

考え事を終えると、空腹を感じたためのつそりと起き上がり、身を震わせる。

『お供するツスよ、大将』

そう言いながら俺の首元に上ってくるクルミ。

僕<sup>しもへ</sup>って言うなら俺の上に乗るのはおかしくないか？と、毎回思っているのだが、まあ、別に良いか、とも毎回思い、放っている。

『今日は何が出るツスかね』

「それこそ運だろ。得物を選び好みなんて出来ないんだから」

『まあ、そうツスけどね』

「後、俺が狩りしてる間にお前も餌探してこい」

『さり気なく俺の心配までしてくれるんスね！そこに痺れる憧れるうー！ー！』

お前、本当にリスか？俺と同じ境遇の人間だと言われても信じるぞ。

『でも大丈夫ツス。木の実は大將の巣に貯蔵してるツスから』

「いつの間に……」

『リス舐めんなッス』

と、こんな会話を最高速で山を駆け下りながらしているのだが、そんな中で平然と俺の背に乗っていられるコイツは本当に何なんだろう、と思わなくもない。

既に山から出て林に入っている。近くにいる狙い目の獲物の群れは……三つか。

『相変わらず嗅覚おかしいッスよね』

「これぐらいは普通だろ」

『普通の狼は嗅覚だけで林の中の全てを把握しないッス』

そんなもんじゃないか？と首を傾げるも、俺以外の狼になんて会った事が無いし、便利である事は変わらないから問題ないと自己完結し、近くにいた三つの群れの内の一つへと足を向ける。

『今日は何にしたんスカ？』

「多分子鹿だな。まあ、そこまで飢えてる訳じゃないし、小さくていい」

『においだけで判断できるのは普通なんスカね……』

「知るか。取り敢えず気配隠せ」

『了解ッス』

コイツ、何だかんだ言ってハイスペックだから困る。俺の見よう見真似の癖に野生動物すら騙す程気配の隠し方が上手くなっている。俺も出来る様になるまで半年以上掛かったのに……。

手頃な木の下で立ち止まり。

「舌嚙むなよ」

思……っ……切り跳ぶ。

そして木の半ばにある枝に着地、また別の木の枝に跳び移り、着地すればまた別の木の枝へ、と繰り返し、獲物の狙いやすい場所を探す。

「ここら辺かな……？」

ちょうど真下に鹿の群が集まっている場所を見つけたので、そこで止まり様子を窺う。

『……やっぱ大将普通じゃないッスよ。普通の狼は木と木の間を飛び回らないッス』

……クルミ、俺も少しおかしいと思ってるから言っな。

「取り敢えず、ゴー!!」

乗っている木の枝を蹴り、地面に狙っている子鹿に弾丸の様に跳ぶ。このやり方は意識して『畏れを抱かせる程度の能力』を

使い出す前に始めた。そもそも、従来の方法じゃ成功率が低いのだ。鹿などの草食獣の視界はほぼ全方向。そのため、肉食獣は基本的に群で、更に弱い獲物を狙うのだが、生憎と俺は一人だ。つまり、狩りが上手くない。そこで、俺は体のスペックをフルに使い、木の上から襲う奇襲作戦を考え、実行。

それ程のスペックがあれば普通に追い掛けても捕まえられるんじゃないかと思うだろう。確かに、追い付けはする。だが、追い付けても急激な方向転換される上に、そもそもハンデがあり、捕まえない。今でも、余程切羽詰まった状況じゃない限り、これを使っている。

グシャリッ

!!

「ん……？」

仕留めた小鹿を啜えて、ゆっくりと歩いていると、珍しい、狼になって初めて嗅いだにおいに気づいた。

『どうしたんスカ大将。小鹿じゃ足りないって今頃気付いたんスカ？ 大体、大将でかいんだからそれぐらいじゃ  
』

まあ、確かに俺はデカイ。人なら二、三人は乗せて走れるんじゃないかと思うが、自分の食う量ぐらいはしっかり分かっている。まあ、

アレだ。分からない奴は『ものけ姫』のモロ 君の真つ黒になつた奴を想像すれば良い。尻尾は一本だがな……って、話がずれたな。これもクルミの所為だ。

『痛い、痛いツスよ!! ちよ、大将の尻尾は下手すりや木も切り倒すんすから、そんなもんで俺を突かないで!!』

腹いせになんか最近妙に長くなった、俺の全長と同じぐらいの尻尾でクルミを突きまくり、ある程度満足したので本当の用件を話す。

「……妙なもんを見付けた」

『へ? みよんなもん、ツスか?』

つつこまない。つつこまないぞ、俺は。

「まあ、行けば分かるか……」

『L e t ' s g o ツス!!』

……もう無理だ。何で英語知ってんだよ!! 何で発音がネイティブなんだよ!! お前ホントは俺と同じ転生者だろ!! ……いや、違うのは分かっているんだけどな。取り敢えず、つつこんで気が済んだので、おいのする方へ向おう。

はあ……、何でこんなに疲れるんだろう。





## 狼と人外達（前書き）

取り敢えず、人の形になれる所までは連続投稿したい目だまです。  
今回は前よりも出番が増えるあの人の登場。

## 狼と人外達

青天の霹靂                      確か、酷く驚くとか、そんな感じの意味だったと思う。いきなり何を言い出すんだと思うだろうが、今の俺を表す言葉が正しくそんな感じた。

『何なんスかねー、これ』

地面に落ちているモノの周りをクルミが突っつきながらうろちよろしているが、そんな事はどうでもいい。問題は落ちているモノだ。特徴的な自在に物を掴むための手、退化し短くなった爪、体を被<sup>おお</sup>っているのは毛ではなく白く柔らかそうな布、頭部からのみ生えている長い毛、僅かに見える肌は日に当たってないのではないかと思う程白い。それはつまり。

「……人間だ」

『ニンゲン……ッスか？』

そう、落ちている……と言うか、倒れているのは人なのだ。しかも子供。身長は推定だが、百三十程度だろう。うつ伏せに倒れている所為で顔は分らないが、地面に広がっている金髪（日本人じゃねえ）の長さ                      足元ぐらいまで                      から、十中八九、女の子。上質な白い布を重ねて形を整えた様な服（イメージとしては古代ヨーロッパ）に靴は皮製のサンダル。一体何処の時代から飛び出して来たんだろうか、この子は……。

そもそも、どうやってここまで来たんだ、この子。俺はあの山を中心としたかなり広い範囲を縄張りとしている。それこそ、最初は人がいないものと探索を繰り返した物だ。それでも、人は見つけれ

れなかった。だが、この子はここにいる。服やサンダルに特に汚れは無い。この位置から俺の縄張りの外に出るまで、普通の人間の速さなら半日は掛かるだろう。そんな距離を、こんな子供が歩いて、靴にも服にも汚れが無い？……余りにも不自然すぎるな。

「取り敢えず、連れて帰るか」

一度、口の小鹿を放し、今度は地面に倒れている子の服の襟の辺りを咥え、軽く放って背中に乗せ、再び小鹿を咥える。

『連れて帰るって……喰うんすか？』

「喰うかアホ」

そこまで腹が減ってないから小鹿を捕らえたんだろうが。目を覚まして、話が聞ければ御の字。そもそも、言葉が通じるかどうかが問題だが……。

「まあ、何とかなるだろ」

いざとなれば後を付けて人里探す事も出来るし、と楽観的にも程がある事を考えながら、住处へ歩き出した俺が、言葉とかその思惑が根本的に意味を為さない事が分かったのは、この子が起きてからの事だった。

結局、その子が目を覚ましたのは、俺が先程捕らえた小鹿をむしゃむしゃとよく考えたらこれはこれでかなりのスプラッタなんじゃないかと、ここ五十年で結構な頻度で思う、ある意味いつも通りの食事を終え、一眠り（NEETさいこー）した後の、もうすぐ日が暮れると言う逢魔ヶ時の事だった。

目を覚ました少女（幼女？）は、上半身を起こし、無表情に俺の住処を寝起き特有のボーっとした様子で見渡していたが、寝そべっている俺と俺の上で未だに眠っているクルミを見て、コテンと首を傾げた。

「…………誰？」

少女は起きた時と同じく無表情でそう尋ねてくるが……………どうしたもののか。

少なくとも色合いとサイズ以外は比較的肉食獣おおかみな俺に普通に声を掛ける事とか、肌は白いいし、髪は金髪だし、今初めて気づいたけど目も碧みどりの見た目完全な外人さんが日本語を話した事は、まあ置いておいても良い。

こちらとしても五十年間まともな話し相手が存在せず、最近はクルミがいたとは言え、話に飢えていると言えば飢えている。飢えてはいるのだが、その、何と言うか……………名前かあ……………名前ねえ……………。

俺もほんの五十年前までは人間だったのだ。当然、名前ぐらいは持っている。だが、何と言うか、その時の名前は余り使いたくないと言うか、字が女っぽい所為で嫌いと言うか……………。

クルミの時はどうしたかって？あいつは最初っから俺の事は大将って呼んでたから名乗ってないんだよ。つまり、狼モドキになっから初めての名乗りである。……………本当にどうしよう。

「いや、なんだ。俺は兎も角、そう言う君は誰なんだ？人……じゃ  
ないけど、名前を尋ねる時は自分からだって最近言われたんだぜ？」

結局、どうするか決まらずに苦し紛れにお茶を濁す俺。

まともに言葉が話せる奴が殆ど存在しない中で誰に言われたんだと  
か言う突っ込みは無しだ。と言うか、五十年前の事なのにどこぞ  
の最強の悪魔憑きのパクリの様な言葉がすらすらと出てくる俺はど  
うなんだろう。ああ、アレって次で最終巻だったのに読み損ねた  
んだよなあ……いや、それよりもゲームの方が先だったか。どっち  
にしろ、もう今じゃ、どちらも手にする事が無い物だ。

だが、そうは分かつてはいるが、五十年経った今でも諦めきれない  
訳で……って、今はそんな事はどうでも良い。

壮大に獣道にぶれまくった思考をブツ千切って寝そべったまま、少  
女に目を向ける。

「……ラファ」

「らふあ？」

「ラファ」

らふあ、ねえ。……ラファ、だよな？カタカナ、と言う事は欧米系  
統のはず。ますます日本語を話す事に違和感を感じるな。いや、カ  
タカナ？……おお、その手があったか。

「じゃあ、取り敢えず俺の事はアヤシとでも呼んでくれ」

「ん……」

俺がそう言つと僅かに顎を引き、頷くラファ。因みに、俺の人間の

時の名前は緋月絢詩ひつきあやじと言う。字だけ見た奴らは揃って女だと勘違いしやがったよ。

取り敢えず、読みは兎も角、漢字は絶対に変える。意地でも。と、俺の決意表明は置いといて、それよりもまずはラファの事だ。

「幾つか聞かせてもらうが、お前、何であそこにいた」

「あそこ……？」

コイツ、もしかして自分がいた場所が分かってないのか？

「ここがどこだか、分かってるか？」

俺がそう言つと、ラファは目を覚ました時の様に住処の中をキョロキョロと見渡し始め、

「……どこ？」

相も変わらずの無表情で、首を傾げる。

「……まずはそこから説明が必要か」

そう呟いて、俺は溜め息を吐いた。

一先ず、俺がラファを見付けた時の事をザックリと説明し、俺の疑問に答えさせていたのだが

Q・竹林にいたのは何故？

「家出した」

Q・どうして？

「喧嘩した」

Q・気絶してたのは？

「滑った」

Q・何処から？

「ん（指で空を指す）」

この通り話になりません。

何この子、電波さん？空でも飛んでたのか？いや、それでも滑ったって言う表現はおかしいか？

その他にも幾つか質問したのだが、無表情がデフォだから何考えているのが全く分からない上に、例に漏れず全て回答は一言。せめてもの救いは質問に素直に答えてくれる事ぐらいだ。それでも、結局殆ど分からなかったと言うのは、変わらないんだけどな。そして、現在。

「スー……スー……」

「どうしてこうなった……」

日もどつぷりと沈み、完全に夜になり、ラファが俺に寄り掛かって

寝てしまった。しかも、掛け布団代わりに俺の尻尾を離さない。  
何故だ、何故ここまで懷かれた。アレか？取り敢えず食える物って  
事で木の実とかを探して来たからか？それとも沈黙を嫌がって、色  
々と人間の頃の  
宗一の修羅場とかその他の話をしたからか？

『両方だと思っス』

……全く否定できない。いや、する必要もないんだけど。別に懷か  
れて困る事も無いんだし。だが、このままと言う訳にも行かないだ  
ろう。狼が子供を育てるとか、それ何て狼少年おれって言う話である。  
今の段階でも十分に可愛い（俺はロリコンじゃないぞ）将来有望な  
子を、栄養失調で死なせる訳にもいかんし、それに、その内家族が  
恋しくなつて自分から帰るだろうしな……。  
それで、だ。

「おい、チートリス。ラファの事だが、どう思う」

俺の首の上に乗っかっているクルミに声を掛ける。

『チートリスって……』

うるせえ。お前なら俺が気付かなかった事でも気付くかと思って期  
待してるんだ。さつさと答える。

『そうッスねえ……。大将の質問への答え、アレは嘘を吐いてない  
と思っス』

「ふむ」

クルミがそう言うのなら、まず間違いなく嘘は吐いてないだろう。



こいつの勘や洞察力って言うのは全く持ってバカにならない。何度も言うが、こいつはこいつでおかしい。

だが、だとすれば、少なくともラファは本気で空から落ちて来たと言う事になる。それも足を滑らせて。……クルミの事は信賴しているが、だからと言ってそんな荒唐無稽な話をポンポン信じられる程、思考が柔軟な訳でもない。まあ、俺の存在の方がよっぽど荒唐無稽と言えない事も無いが、少なくとも、俺は実際に目で見たもの以外は信じる事は出来ない性質だ。

『それと……』

考えを纏めていると、クルミが何か言い掛けるが、すぐに口を噤む。その後の言葉が続かないのは、言うべきか迷っている、と言うよりも、言葉を選んでいいる、と言う感じだろう。実際に、クルミが再び口を開くまで、そう時間は掛からなかった。

『何となく、俺や大将に近い様な……正反対な気が……』

「……………」

狼にも表情と言う物があるならば、今の俺は酷く難しい顔をしているだろう。

俺と似ている、と言うのは分からなくも無い。五十年で獣の生き方が染み付いてはいるが俺だって元は人間だ。だが、クルミとも似ていて、更には正反対？正直訳が分からない。と言うか矛盾してるだろうが。

『でも、俺達と同じで普通の生き物っぽくないのは確かッス』

「普通の生き物っぽくない、か……」

ラファは俺の体を枕代わりにしてスヤスヤと穏やかな寝息を立てている。

やっぱり、色々と事情があったりするんだろうか。まあ、その事情に俺自身から進んで関わる事はないし、嫌がる事をするつもりは尚の事ない。ただ、こんな小さな子でも、それなりの事情があったりするんだと思うと、何とも言い難い気分になるだけであって、一寸待て。

「おい。今の言い方だと俺とお前もまともじゃない事になるぞ」

『気付いてなかったんすか？』

「えっ」

『えっ』

「何それ怖い」

どうやら、俺は狼ですらないらしい。俺の正体はいずこへ……。詳しく聞けば、俺自身は、クルミと初めて会った時から動物とも違う何かであり、クルミもここ数ヶ月共に行動した結果、質の違いはあるが俺と同種に為ったらしい。で、そんな俺らとラファは似ているが、正反対の存在の様な気がする、と。なるほどなるほど。

『何か分かったんすか？』

「分からん」

『……………』

おいこら、まず自分の正体も分かってないのにラファの事が分かる訳ないだろ。だからそのジトツとした視線を引っ込めろ。

まあ、実際の所、別に自分の正体は何かなんて言うのは、どうでもよかつたりする。別に正体が分かったからと言って、今までと生活が変わる訳じゃないし。変化があるとすれば、ラファの存在だろうけど、まあ、それも二、三日で元に戻るだろう。そうなればほら、今までの五十年と何ら変わりなく天寿を全うできるだろうさ。

取り敢えずではあるが、今回の事を結論付けて、俺は目を閉じた。

「そう思っていた時期が俺にもありました……」

「……どうかした？」

今日も今日とて山の中を跳び回っている途中で漏らした呟きが聞こえてしまったのか、首にしがみ付いているラファが首を傾げているのを、適当に何でもないと誤魔化しておく。実際に大した事じゃないし、人に話す様な事でもないし。ラファも、そんな俺の雰囲気を感じたのか、それ以上は何も言ってこなかった。

さて、ラファを拾ったあの日から太陽が昇って沈んでを繰り返す事三十回、未だにラファは俺達と共にいた。……と言うよりも、むしろ前よりも懐かれた？

『ラファ、何度も言うツスけどね、大将の上は俺の特等席なんス！  
！そこを退くツス！！』

「いや」

『大体、何でラファが狩りに付いて来るんスカ！！役に立たないの  
につー！！』

「役に立ってないのはクルミも一緒」

『ラファ、お前は今言ってはならない事を言ったツス……！！』

直接見えないが、取り敢えず二人が険悪な雰囲気真っ只中なのは分かる。と言うか、俺の上で喧嘩するな。首にしがみ付いてる所為で声が五月蠅いんだよ。クルミ、おまえじゃラファには絶対に勝てないから止めとけ。燃やされるぞ。

『それでも引けない戦いが、ここにはあるツス……！！』

格好良く言ってもただのポジション取りじゃねーか。そしてラファ。頼むから戦闘態勢に入らないでくれ。力を集中させるなそこでやられると俺にまで被害がくるんだよおい！！

ドオン                      ツー！！

汚い花火が、山に咲いた。

「テメエら、いい加減にしろよ……？」

所変わっていつもの住処。だが、そこにいつもの平穩はない。

濃厚にして純正の怒気殺気狂気畏れ。それら全てが、たった一人と一匹に向けられていた。直接向けられていないにも関わらず、山の動物どころかそれら周囲の竹林や森に住むものすら逃げ出している。そんなモノを直接向けられている彼等の心中は推して知るべし。クルミはカタカタと震え、ラファもいつもの無表情ながら、顔にはダラダラと冷や汗を掻いている。

「なあ……」

『「（ビクウツー!!）」』

いつもより低い、明らかに怒気をはらんだ声に過剰に反応する。

「今まで散々言ってきたよなあ？ 仲良くしろって。なのに何で喧嘩すんのお前ら」

言葉を吐き出す度に場の空気が更に重くなっていく。嫌な緊張感<sup>フレッシュャー</sup>が巢穴に満ちていく。

「特にラファ。お前のアレは使う場所を考えろって言ったよなあ。今回は怪我ですんだから良いものの、死んじまったら俺でもどうしようもねえんだぞ。猛省しろ」

「……ごめんなさい」

『すいませんッス……』

そう言つて頭を下げる二人を見て、感情の放出を解いた。まあ、二人ともしっかり反省しているみたいだし、もういいだろう。

「ん……」

するとすぐにラファが首にしがみ付いて顔を埋めて来る。怒られたすぐ後に、相手の感情を読み取つてそれが出来るなら、お前は大物になるだろうよ。

『て言うか、大将、『畏れ』まで使つてたッスよね……』

そう呟くクルミの方は未だに少し顔色が悪い様に見える。いや、リスだから顔色なんて分からないんだけども。

「当たり前だ。それぐらいしなきゃ分からんだろうが」

『やり過ぎッスよ!!』

「もう一遍いつてみるか？」

『すんませんでしたっ!!』

分かればいい。クルミがボソツと、鬼畜だ、とか呟いてたが、知つたこっちゃない。

それよりも、ラファの事や、何故二人（？）があれ程の爆発に巻き込まれて、傷一つ無いのか、について説明しよう。

あんなこと

まず、どうしてラファに爆発が出来たか、だが、俺達は勿論、ラファ本人にも具体的な原理は何一つ分かってない。ただ、感覚的に使っているが、ずっと昔から当然の様に使えたそうだ。

俺とクルミがその事実を知ったのは出会った次の日の事。ラファの食事に、と魚を取って来たはいい物の、幾らなんでも生のまま食わせる訳にもいかん、と悩んでいた時、もうやけくそでラファに「火、持っていないか？」と聞いたのだが、ラファはただ「ん」と頷き、集めておいた小枝の中に手をつ込んで、それを燃やしたのだ。もう呆然としたね。クルミの奴は初めて見る火にはしゃいでいたが（本当に獣か？）……………。

この時、クルミが言った様にラファが人外であると判明したのだ。因みに、火だけでなく、それこそ死者甦生以外の殆どが出来るらしい。

で、もう一つ。ならば、どこまで出来るか試してみよう、と思い付き、やらせてみたのだが……見事にぶち壊してくれたよ、巢穴を。あれにはさすがのクルミもポカンとした。だが、こっちの話はこれからだ。その時、俺はあまりの状況に現実から目を背けようと、一言呟いた。

『ねーよ』

その瞬間、崩れた巢穴がここにあった。

崩れな筈の巢穴が、元の姿で、その瞬間、崩れた巢穴が出来る可能性があるとするればラファだが、そのラファがいつもの無表情を崩し驚愕していたから違う。クルミは初めから論外。ならば俺か？と考えた所で、ある単語が頭に思い浮ぶ。

『肯定と否定を操る程度の能力』

この時、俺は初めてこの能力を使った。

その後の実験によつて明らかになつた能力の本質は『世界の書き換え』。『肯定』により創り、『否定』により抹消する。有無を問わず、俺の是非一つで世界を変える事が出来る能力。『魂へ不干渉』と言ふ制限もあるが、十分だろう。

つまり、爆発したのに誰にも傷がないのは、俺がその事実を『否定』したから。

まあ、死んだら魂が無くなる所為で能力が発動しないから、今回はきつちり説教させてもらつたがな。

「で、そろそろ出てこないか？」

巢穴の入り口の方ににらみ付ける様な視線を送る。

クルミやラファは気付いてない様だが、舐めてもらつちゃ困る。この山は俺の庭だ。<sup>なつち</sup>異物のおいが混じつてりや、気付くに決まつてるだろ。

「へえ、いつから気付いとつた？」

そう言いながら、一人の男が巢穴に入ってきた。

その男は、身長は百八十半ばで体の線は細く、ラファと同じく古代西洋から来たかのような服装に革のサンダル、瞳は混じりつ気のない青、髪は鮮やかな短めの金髪をオールバック風に軽く上げている。そして何より、一番目を引くのは、絶えず今でも軽い笑みを浮かべているその顔である。

イケメン。そう、イケメンである。モテない男の敵、人生勝ち組、差別の象徴　　イケメンである。

「ラファが爆発起こした辺りだよ」

吐き捨てる様に答える俺は相手がイケメンと言ふ時点で敵意丸出し



だ。イケメンなんぞ滅んでしまえばいいのだ。

「何や、初めから気付いとったんかいな。随分鋭いんやねえ」

「隠れるつもりなんか無かった癖によく言っ」

確かに、隠れてはいたが、それはあくまで姿だけだ。視線も気配も隠す気なぞ微塵も感じなかった。ただ単に舐められていたのか、それとも何か理由があったのか……服装や髪からして、十中八九ラファの関係者だろうが、それはイケメンである事を別にしても警戒を解く理由にはならない。今問題なのはラファとどう言う関係か、だと言つか、ラファと言い、この腐れイケメンと言い、何で外人の癖に日本語ぺらぺらなんだよ。しかもコイツに至っては似非関西弁だぞ？畜生、どうせその胡散臭い上に似合ってない喋り方もイケメンだからって理由で許されるんだろ？死ねよ、ホントに。

「で、何の用だ」

「いやな、その子連れ戻しに来たんやけど……」

その子　　確実にラファの事だろう。コイツとどう言う関係かは知らないし、知らなくていいならそれでいい。それこそ、ラファに一言聞けば済む話だ。

だが、たったそれだけの事が出来なかった。

アイツがそこで言葉を切った瞬間、全神経全感覚を目の前の存在に集中させる。いや、否応なしにさせられる。脳が、俺の五十年で培ってきた洞察力が、野生の勘が、その全てが警報を鳴らす。全身の毛が逆立つのを感じる。注意信号<sup>イエロー</sup>通り越して危険信号<sup>レッド</sup>だ。

「キミ、随分面白そうやねえ」

俺を指さしてそう言うか否かと言う時、俺の意志に関係なく既に体は動き出していた。全身の筋肉を使った停止<sup>ゼロ</sup>から最高速<sup>トップ</sup>への瞬間的な加速。普通なら反応すら出来ない筈の、必殺の一撃で無防備に晒された首に喰らい付く。

グシャリ

ッ!!

肉を砕く音が響いた。

## 狼と人外達（後書き）

えー、急展開過ぎてワロタ、とかは言われるかもしれないとビクビクの目だまです。と言うか、書き直してるけど、前より少しは向上してるのか？もついつその事、一度削除した方が良かったのかな？と、思わなくもないですが、まあ、それはそう言う意見があった時に、と言う事で。

誤字脱字報告や感想があれば、下さい。特に感想は作者が狂喜乱舞します。批判は心が折れない程度にお願いします。

ではまた次話で。

## 狼と『神』と新天地（前書き）

この物語はフィクションであり、作者の妄想から滲み出た物です。ある事柄へ明らかにイメージを壊す物が描かれています。が、事実無根の妄想ですので、笑って済ませてください。お願いします。

## 狼と『神』と新天地

ただし、噛み砕いたのは、相手の左腕だ。

「ッ！？」

あり得ない。今の、俺に出せる最高速だぞ？それに反応する所か、きつちり防御しやがった。どんな化け物だコイツは。

実の所、この巣穴の入り口はそこまで広くない。俺が入れる程度だ。つまり、最初から回避は不可能。少しでも避け様とすれば間違い無く殺せていた。さっき、俺を指さしたのが右腕だったのを考えるとコイツの利き腕は右。と言う事は、とっさに左腕を出したんじゃない、きつちり見てから反応したと言う事になる。奇襲を受けたにも関わらず、この状況でコイツはほぼ満点の対応をしゃがった。

「ハア                      ツー！」

そこまで思考を巡らせ、左腕に喰らい付いたまま、さらに地を蹴る。攻撃自体は防げて、そもそもの大きさが違うのだ。勢いまでは殺せない。

「うおっ！？」

結果、俺に押される様な形で山を強制的に下ろされる。途中にある木々をへし折りながら麓まで一直線。止めにその勢いのまま相手を投げ飛ばす様に体ごと振るい、左腕を千切る。投げ出された相手は、麓の森の木を数本折った所で止まったらしく、砂埃が立ち込めている。

「……クッ」

砂埃が晴れていく。そこに、ソイツは立っていた。二の腕から先が無くなり、血をダラダラと流してはいるが、最初と同じ様に平然と笑みを浮かべて立っていた。いや、その顔に浮かんでいるのはむしろ最初よりもずっと愉しそうな笑みだ。

「クックックッ……アーハッハッハッハ！！ええで！！最高や！！」

「……………」

片腕を失くしたにも拘らず突如笑い出したソイツを見て、俺は何も言えなかった。と言うか、ぶっちゃけ引いていた。ドン引きである。だってアイツの左腕、見事に失くなっているんだぞ？傷口の周りの服は真っ赤に染まり、傷口からは白い骨が見えてるんだぞ？そんな状況であんな風に笑っている奴がいた普通に引くだろ。

一頻り笑って落ち着いたのか、フウ、と静かに息を吐き、そして、急に空気が重くなった。

「……ッ！？」

何だよ、これ。俺がさっきまで放っていたアレとは比べ物にならない。まるで深海の中にいるみたいだ。重圧に潰されそうになる。周りの木々までが悲鳴を上げるかの様に軋む。だが、瞬時に自らに掛かる重圧を否定し、いつもの状態まで戻す。筋肉も縮まってない。視界も良好。思考も平常。大丈夫だ。まだいける。

「その姿になってたつた五十年程度でよくもまあ、ここまで容赦無く殺そうと出来るもんやねえ。ほんま感心するわ」

「デメエ相手に余裕が持てるなんざ思ってたねーよ。俺は分を弁える性質なんだ」

「ええねえ、その態度。ますます気に入った……わッ!!」

そう言い切ると同時に一気に距離を詰めてくる。少なくとも五十メートルは離れていた筈なのに、その距離を一瞬で潰された。おまけに相手からはラファが使うのと同じ様な力を感じる。だが、密度も量もラファとは桁違い。この山一帯消し飛ばんじゃないか？

「チィッ!!」

真正面から右拳が振り抜かれる。フェイントも何も無い真っ正直で力任せの一撃。

思考は刹那。俺はその一撃を横に跳んで回避する。再び距離を取った時に、その判断が正解だった事を理解した。

「げえ……」

挟れてやがる。何が？地面がだよ。拳の軌道に合わせて振り抜かれた位置から見事に一直線に深い溝が出来、その延長線上にあった木など言うに及ばず見事に粉碎されてやがる。……これ、掠るだけでもアウトじゃないか？

拳を振り抜いた状態で止まっていたイケメンがゆっくりとこっちに体を向ける。

その顔は相変わらず笑ったままだが、何と云うか、笑顔の質が変わった気がする。今までののが大人が浮かべる微笑の様な感じだとすると、今は新しい玩具を見つけた子供の様な無邪気な、だが、愉悦に染まった様な笑みだ。それを踏まえた上での結論。

バトルジャンキー  
(こいつ、戦闘狂かよ……!!)

「今のをかわすか……なら、次は

」

「そこまでです」

イケメンが喋っている最中に凜とした、芯の強そうな声が割り込む。それと同時にどう言う理屈か、俺にすら見えない速さ、と言うよりも瞬間移動でもしたかの様に、数十にも及ぼうかと言う外人が手に剣や槍を持ってイケメンと俺を取り囲む。  
えっと、これ、今どういう状況？

「主、それ以上はここら一帯が消し飛びます。やめて下さい」

俺が今日は千客万来だなあ、と状況に付いて行けず現実逃避していると、二人の女性と一人の男が人垣の中から一歩前に出てくる。  
一人は銀髪をポニーテールにした、吊り目で気の強そうな美人。背は女性ではそれなりに高く、どこが、とは言わないがある一部の所為でスラリとしている様に見える。さっき、あのイケメンを止めてくれたのは彼女の様だ。

「いや、せやかてこんな面ろそうな相手やったら全力でやらな……」

止めてくれ。一撃で死なない限りは『否定』で治せるが、お前の場合は一撃で消滅させられそうなんだよ。と言うか、本当に面白そうっただけで俺と戦ったのか。真正の戦闘狂じゃねーか。

「ダメですよ。あるじの後片付けは私達の仕事なんですからね？」



さつき前に出て来た内のもう一人の女性の方が口を挟む。

赤味が掛かった髪を肩に掛かる程度で切り揃えており、一目見ただけでどこかのんびりとした雰囲気を感じ取れる。さつきの女性とは色んな意味で正反対だ。どこが、とは言わないが。と言うか、俺って結構余裕があるんだな。こんなしょうもない事考えられるって。それにしても、この人の言葉に俺らを囲んでいる奴らが全員頷いているんだが……アイツどれだけ暴れたんだよ。

「と言う訳で、あるじには私とガブちゃんからのお説教ですよ？」

そう言う横でガブちゃんと呼ばれた女性が頷いている。それを見て見る間に顔が青褪めていくイケメン。

どんな説教かは知らないが、出来るだけきっちりやっておいて欲しい。もう二度と俺に近付かない程度に。

「フツ、ボクが大人しく拷問せつぎょうを受けると思ったら大間違い

」

「『我、汝の動きを禁ずる事を告げる』」

イケメンが逃げようと身を翻すが、その動きはガブちゃんさんの一言によって止められた。と言うか、今拷問って書いて説教って読まなかったか？……まあ、いいか。既に経験ありそうだし、大丈夫だろう。ほら、左腕もいつの間にか治って  
何で治ってるんだよ、おい。

「さあ、行きますよ。あ、皆さんもお疲れ様でした」

「ウリ、事情の説明はよろしくね」

そう言つて、動けなくなつたイケメンにどこからか取り出した鎖で縛り上げ、余つた鎖の端を掴み、颯爽とにこやかに飛び去つて行つた。……マジかよ。人が飛んだぞ？どう言う理屈で飛んでるんだよ。重力仕事しろよ。しかも、いつの間にか周りの奴らも消えている。本当にどうなつてゐるんだ……。

そして、状況にも場所的にも取り残されている俺と、俺に説明してくれるらしいウリと呼ばれた茶髪の青年。身長は百七十後半つて所目付きが若干悪いが、顔の作り自体は良いからワイルドで済む程度だろう。

「おい。説明は後でさせるから、取り敢えずラファの奴連れて帰つて良いか？」

若干、口調は荒いが、話が分かる常識人と言つた所であろうか。少なくとも、アイツみたいに問答無用で喧嘩売つてくると言う訳ではないらしい。と言うか、ウリくんの顔にも疲労の色が浮かんでいる。

「まあ、俺は説明してくれるなら文句は無いけど……」

そこまで言つと、前足に何か引つ張られる様な感覚を覚えた。

「ん」

そちらを見れば、いつの間に来ていたのか、肩にクルミを乗せたラファが俺のすぐ横にいた。しかも、俺の前足の毛を握り締めている。その様子を見て、ウリくんは嘆息し。

「あんたとも一緒にいいから」

と、そう付け足した。

「さて、ようこそ。ボクの城に」

イケメンの突然の襲撃から十数分後。例のイケメンがそう言った。その姿がさっきよりもボロボロになっているのは気のせいではないだろう。

それにしても、城、ねえ。周りを見渡せば、俺とクルミの正面には豪華な机と椅子、そしてそれに座るイケメン。そして、ここから少し離れた位置には規則正しく並んだビジネスデスクと、そこを慌しく動き回る外人っぽい人々。……どう見てもただのオフィスです本当にありがとうございました。とは言っても、それは地上にある場合であって、雲の上にある場合はただの、と言う表現は正しくないが……少なくとも城ではないと思う。

「さて、そうやねえ。まずはばっさりとボクの正体からいこか」

もう何でも良いから早くしてくれ。俺はもう疲れたんだ。今日一日でどれだけ精神すり減らしたと思ってるんだ。早く巣穴に帰って眠りたいんだよこっちは。

「狼君に分かる様に言えば『神』、『この星の意思』、『歴史の修正力』ってどこかいな」

「……は？」

おい、今こいつは何と言った？『神』？まだいいだろう。まだ確認は出来ていないが、この世界が能力名通りに東方の世界だとすれば、妖怪や魔法使いまでいるんだ。神様ぐらいいてもいいだろう。だが、他の二つは違う。明らかに桁がおかしい。それはこの星その物と言う事じゃないか。

「ああ、今君が思つとる通りで間違いないで？ボクはそう言う存在や」

何てこった。俺はそんなもとやりあつたのか……。いや、それなら尚の事、星の意思が似非関西弁つて言うのはどうなんだよ。……うん？待てよ、だとするとラファ達は

「おつ、気付いた？まあ、さすがに『神』『ラファ』『ウリ』『ガブ』と並べられて分からん程君は鈍くあらへんもんなあ。ついでに、もう一人の愛称は『ミカ』やで？」

「マジかよ……」

今度こそ頭を抱えた。いや、あくまで狼だから出来ないけども、出来る事ならそうしたい気分だ。

これだけ名前並べられて気付かない奴はいないだろう。さっきから驚いてばかりの様な気もするが、それも仕方が無いだろう？だってあのどう見ても見た目子供以外の何者でもないラファが『大天使』だって言われたんだぞ？と言うか、俄か知識しかなかったけど、色々宗教観が崩れた。

「まあ、色々としョック受け取る所悪いけど、もう一つお知らせが

あるで？」

「……………何だよ」

もうどうとでもなつてしまえ。今更何言われたつて驚くものか。人間（？）も、驚きすぎると平常心に戻る物だ。

「狼君とリス君の事やけどね、君達の正体は『妖怪』。『妖獣』。『魑魅魍魎』なんて言い方もありやね」

「一寸待て」

確かに自分が妖怪だつて言うのには驚いたが、それは今更だし、思い当たる節もいくつかある。それに、俺自身が変わらなければ俺の正体を知る事に意味は無いと思う。だが、それ以上に気になる事がある。

「何故、お前がそんな事まで知っている」

俺の当然の疑問を、ソイツはニヤリと笑って答えた。

「言つたやろ？歴史の修正力や、と。アカシックレコードぐらいには繋がつとるんやで？」

……………もう嫌だコイツ。色々と規格外すぎるだろう、本当に。

「で、や。実の所、君達をこのまま帰すわけにはいかんや」

神　　何かイラつくので暫くはイケメンでいいだろう  
がいきなりそんな事を言い出した。

「『は?』」

その言葉に、俺と今まで空気もいい所だったクルミの疑問の声が重なる。込められた思いはただ一つ。

何言ってんだ、コイツ……?

「ああ、別に殺すとかやないから安心してええで? 君達にはここで強くなつてもらうで。歴史がそう言う風になつとる」

つまり、これから先、俺達が強くなつていないと歴史的に不都合になる、と言う事だろう。そのために、俺達をここに残す、と。

「それに、ラファも懐いとるし、ボクは遊び相手が出来る。君達は強うなれる、と。ほら、一石三鳥や。それに、正直皆ボクが出た時点で強化フラグやて分かつとったやろうし」

一体何の話だ。が、確かに俺たちに不利益は無い。と言うか、選択肢が無い。拒否権とかないだろうし。つまり、俺達には頷くしかないのだ。これ、絶対脅しだよ。だってアイツ、しっかり拳握ってるんだもの。

そして、俺達の天国コルクの生活が始まる事になった。

「で、何でお前喋らなかったの？」

『『神』とか『妖怪』とか、正直何言ってるか分からなかったッス……』

「あー……」

さすがのチートリスも知らない言葉はどうしようもないらしい。この後きつちりと説明しておいた。

## 狼と『神』と新天地（後書き）

主人公のキャラが大分変わった様に思う目だまです。でも殺伐とした世界を殆ど一人で五十年生きていけばこんな感じになると思うんだ。時代とシナリオが一寸変わる程度でここまで変わるんだねwww

誤字脱字や感想があればよろしくお願いします。例によって批判はお手柔らかに……。



## 狼と千年（前書き）

取り敢えず、連投はこれで最後です。

## 狼と千年

「『第一回 ドキドキ 神様と学ぼう 狼君の存在の非常識さ編』  
〜！イエ〜イ！！ドンドンパフパフウ！！」

「『……………』」

さて、神様（失笑）の襲撃プラス衝撃の事実の大暴露大会から一夜明けた今日。

どう言う訳か、昨晚こいつらの家と言う名を借りた宮殿モドキの豪華な部屋の一室を宛がわれ、朝起きたらいつの間にかラファが俺を枕にして寝ていた、というハプニングはあった物の、それ以外に特に問題も無く快適に過したのだが、部屋を出た途端、神様（爆笑）に拉致され、気が付けば昨日と同じ場所に座らされており、昨日、豪華な椅子や机があった場所には、何故かマジックボードと水性のマジックペン（黒と青の二色）を持った神様（苦笑）がいた、と。うん、取り敢えず目の前の存在が諸悪の根源の様だ。噛み付けばいいのだろうか？と言うか、さすがに星その物な奴に非常識とか言われたくない。

「何や、テンション低いでえ二人とも」

「朝っぱらから拉致られてテンション上がる奴が居たらそいつはおかしい」

『まだ眠いッス…………』

「さて、取り敢えず狼君には自分の事をしっかりと理解してもらわなあかん」

ばっさり無視しやがった。

そしてラファを含む大天使の四人が後ろの方に控えてるんだが、大天使って暇なのか？しかもその内ラファとミカさんは舟漕いでるぞ、おい。

「まず、力の説明からいこか。能力とはまた別の、種族によって変わる潜在的な力やね。種類としては四つ。まあ、今は月におる連中合わせて三つしかあらへんけど」

そう言つてホワイトボードにペンを走らせ、『靈力』『妖力』『神力』『魔力』の四つの単語を書き込んでいく。何故漢字なのか、とかは今更特に突っ込む様な事でもないんだろ。だってこいつだし。

「字面で大体分かるやろうけど、それぞれ『人間』『妖怪』『神』『魔法使い』が持つ力やね。尤も、『魔法使い』はまだおらへんから除外、っと」

更に四つの力の下に矢印を書き、対応する種族をホワイトボードに付け足すと、最後に『魔力』と『魔法使い』の上から纏めてxを記した。

そう言えば、『魔法使い』がまだいない、と言う事はここは俺からすると過去と言う事なんだろうか。可能性としては、人類が滅んだ後の世界も考えていたんだが……後で確認しておかないとな。

「普通、これらの力を複数持つのはありえへん。ありえへんのやけど、狼君はちゃう。妖怪として生まれた事で『妖力』、更に人としての魂を持つとる所為で微かにやけど『靈力』まで持つとる」

微かにつて……役に立つのか、それ。

「今のままじゃ役に立たへんよ？でも『靈力』は修行で、『妖力』は生きればそれだけで向上していく様になつとる。どうせ、ここにおつたらいつかは神格化するやろうし教えとくけど、『神力』は信仰を受ければ上がるで」

おい、どうせつて何だ、どうせつて。

「使い方の違いとかもつと細かいところもあるけど、まあそれは実際にやる時でええやろ。さて、力についてある程度理解してもらえたところで、次は能力についてやね」

そこで一度、ホワイトボードに書かれている言葉をどこからか取り出したクリーナーで消すと、デフォルメした自分と吹き出しを書き、その中に能力と書き込んだかと思うと、デフォルメした絵が思いの外上手くいったのか、それを少しの間ニヤニヤしながら眺め、それからようやくこちらを向いた。……何やってんだよ。

「さて、リス君の能力も後で解説せなあかんけど、まずはこっちやね。『畏れを抱かせる程度の能力』」

「『肯定と否定を操る程度の能力』はいいのか？」

「うん？ああ、そっちは後でひたすら練習するだけでええんよ。まだ甘いけど、使い方自体は間違つてへんから」

……つまり『畏れを抱かせる程度の能力』は使い方が間違っている、と？……あれ以上どう使えばいいんだよ。

『と言うか、俺が能力持ちって言うのはスルーツか、大将……』

まあ、むしろ納得したな。お前は能力持ちじゃないとありえないだろ、逆に。じゃないとお前のハイスペックぶりは理解できない。

「さて、『畏れを抱かせる程度の能力』やけど、別に使い方が間違っ  
つとる訳やない。ただ、能力の意味合いがちゃうんや。さて、こ  
こで問題や！！」

ビシッと音がするぐらいの勢いで俺達にペンを向け、相変わらずの  
イケメンスマイルで、その問題とやらを口にした。

「『妖怪』や『神』はどうやって生まれるでしょ〜かつ？」

えっと、普通に生まれるんじゃないか？と言うか、その二つは同系  
列なのか。むしろ正反対の様な気がするが……。と、頭を働かせて  
いたのだが、少しすると神様（馬）がブツブツ、とか言い出した。

「ハア〜イ、時間切れえ！！正解は、『人の想像』からや！！」

「『人の想像？』」

ちよつと予想外の答えに俺とクルミがそろって疑問の声を上げると、  
ホワイトボードに新たな書き込みをしていく。

「せや。『幽霊の正体見たり枯れ尾花』『鰯の頭も信者から』。『  
妖怪』は人の恐怖から、『神』は人の信仰から、それぞれ生み出さ  
れる」

そう言っつて、まあ、ボクや狼君みたいな例外もあるんやけど、と付

けだし、更に解説を続ける。

「そして、ここからが重要なんやけど、『妖怪』や『神』が死ぬ事は殆どあらへん。でも、消えることはある」

「……………」

それは、まあ分らない話でもない。

そもそも、東方はそうやって消え掛かった者達が集まった幻想郷が舞台だったはずだ。まあ、明言されてないし証拠もないが、この期に及んで、東方の世界じゃありませんでした、なんて展開はないだろう。そんな展開は誰も望んでないだろうし。

「『妖怪』や『神』言うんは、結局はよう分からんものの総称や。

それが人の想像で脚色され肉付けされていき、形を得る。せやけど、科学が発達してまうと怪異は現象に成り下がる。そして、忘れ去られ、幻想になる。そうならへんために、『妖怪』は人を恐怖させ、『神』は信仰を集めようとする。でも、キミの能力はそう言った連中に真っ向から喧嘩売っとる」

スツと目を細め、今までのどこかお茶らけた雰囲気消し真面目な表情で俺を見据える神。絶対的強者としての風格を身に纏うソイツは、確かに神と言うに相応しいだろう。

「キミはその能力を持つ限り、何もせずともどれだけ時代が進もうとも、決して幻想になる事はない。その時、『妖怪』であろうと『神』であろうと関係なく、そう言った存在としてあり続ける」

……確かに、それが本当ならば、いや、アカシックレコードとすら繋がっているコイツが嘘を吐く事はあっても間違える事はないだろう

う。

だとすると、『畏れを抱かせる程度の能力』は間違い無くともない能力だ。たったワンアクション起こすだけで、『畏れ』を集め続ける。人外に限った話ではあるが、それはある意味、どんな能力よりも便利な能力じゃないか……？

「まっ、そーゆー事や。理解してるのとしてへんのじゃ、大分違うからね。しっかり覚えとき」

そう言う神の雰囲気は、いつの間にかいつもの胡散臭い物に戻っていた。普段からあの状態でいたらしいのに。

「疲れるからイヤや」

そうかよ。後ろでガブちゃんさん残念そうに溜め息吐いてんぞ？

「じゃ、次はリス君の能力を発表しよか」

流してやるなよ。部下だろ？後もうホワイトボードある意味ないよな？使ってないし。

「だってイラスト消したくないんやもん！！」

「ダメだこいつ早く何とかしないと……」

もん、とか言ってんじゃねえよ。気持ち悪い。イケメンだからって何でも許されると思ってんじゃねえぞゴラァ！！

「まあ、それは置いといて、リス君の能力名は『あらゆるものの本質を理解する程度の能力』や。ぶっちゃけ特に説明いらへんやろ、

これ」

そこでぶっちゃけてやるなよ。見ろ、クルミの奴自分の扱いの悪さに涙目になってんぞ？

「ん〜、そう言つてもなあ……あ、そや」

神が顎に手を当て考えていると、何か思い出したのか、指をパチンとならした。畜生、サマになってやがるな、これだからイケメンは……。まあ、人間だった頃はジミメンの代表だった俺が言つても、ただの僻みにしか聞こえない、と言つか純百パーセントの僻みだ。

『何かあるんスカ！？』

急な叫ぶなよ。驚いたじゃねえか。と言つか、久々にしゃべったなお前。

『正直未だに大将達の会話には付いて行けないッス』

……うん、悪かった。後でちゃんと解説してやるから、取り敢えずその泣きそうな顔をどうにかしろ。

『……グスッ』

「うん、もうええかな？リス君の能力は今はまだ理解するだけやけど、妖力が使えるようになれば殆ど何でも出来るで？」

『え、そうなんスカ？』

「細かい理屈もあるけど、取り敢えず本質が理解出来て、さらに活



用出来る力があるんやったら出来ん訳がないやろ？」

「なるほど。本質が分かれば応用も利く、と」

そー言う事やね、と神は俺の言葉に頷く。

クルミは自分の能力がそれなりに凄いと分かったのか、嬉しそうに俺の横ではしゃいでいる。はしゃいでいるんだが

「でも今は使い物にならないよな」

「そやね」

『分かってるツスよそれぐらい!!』

俺の言葉に当社比三割り増しのぐらいの笑顔で頷く神。そして今度は普通に泣き始めるクルミ。……おおう、カオスだ。かく言う俺も、泣くクルミを見て若干顔がニヤけてる。どうも俺はいじめっ子体質の様だ。獣になって気付くとは……。

「さて、じゃ、こっからは修行の時間やで？まずは妖力と能力の使い方覚えて、あつ、狼君は霊力もやな。そっからはひたすら実践や」

「『え?』」

「狼君はボクとラファ、リス君はウリとミカが面倒見るから。スパルタで行くでえ?取り敢えずの目標は妖術マスターして人型になる事やな」

「『え?え、どう言う事?』」

神の奴は嬉々としてこれからの予定を楽しそうに話しているが、俺とクルミは状況に付いて行けず完全に混乱している。と言うか、コイツに教わるとか完全に死亡フラグじゃねえか。

「じゃ、二人ともそっちは任せたで？ 逝こか、狼君」

おい、止める引っ張るな！ 字が違っただよ字が！！ 完全に死ぬよなあ、俺！！

「大丈夫やて。致命傷でもラファが治してくれるから。ラファ、『あらゆるものを癒す程度の能力』って言うの持ってるねん」

な、と呼び掛ける神にラファが「ん」と頷く。

なるほど、その能力はラファエルっぽい……じゃなくて、それは俺が死に掛けること前提だよな！？

「『死に掛ける事なくして成長はありえへん』 バアイ『神』」

「違う、それは野菜人達だけで他の生き物は普通に死ぬから！！」

普通はまずさつきみたいに座学から始めるもんだろ！？ 何一つ分からないままやつても一緒だから！！

「手取り足取り教えられた事は身に付かへん！！ 実戦あるのみ！！」

「それは人斬り抜刀斎の流派だけだ！！」

そしてやっぱり字が違っただよ！！ 実戦じゃなくて実践だろうが！！

「頑張って」

「ラファ!？」

あれ?ラファにまで見捨てられた?いや、多分だけど本人は普通に応援しようとしてるんだろう。だが、今の俺には死刑宣告以外の何者でもないと言う……。

「じゃ、まずはボクが攻撃するからそれを避ける修行からや。能力使おうが、ボクに攻撃しようが何でもありや」

そう言つて宙に浮かび、両手を広げる。……おい、掌辺りから漏れだしてバチバチ言ってるそれは電流じゃないよな?頼むから違うと言つてくれ!!

「時間制限は今から昼間までにしよか。それじゃ、よおい」  
「

現在の大凡の時刻、午前八時。昼までの時間、約四時間。

「＼(^o^)／」

「スタートツ!!」

「いや、ちょまつ……ギャアアアアアツ!!!!!!」

それから約四時間、辺り一帯に俺の断末魔の声が響き続けたとさ。



『天地乖離す』  
エヌマ

開闢の星ウウウ！！』  
エリシユ

『どっから乖離剣出し  
られない』  
そんなもん

（光に飲み込まれ叫びすら上げ

……正直、今もまだ生きている事が不思議でならないんだが。

「ん、今度の技は何かええかなあ……」

今までの修行風景を思い出して遠い目をしている俺の横で、鼻歌交じりにネタを考える神。……頼むから自重してくれ。

「大丈夫やて、今はもう死なへんのやから」

死ななければ何してもいいのかよ。死ななくても痛いんだぞ？と言  
うか、最近ネタが酷くなり始めたのは俺が死なくなつたからかよ。  
どうりで最近は過激なネタが多いと思つた……。

はあ……と、溜め息を吐くと、

「どうしたの？」

胡坐を掻いている俺の足の間に座っているラファが心配そうに俺を  
見上げた。

「いや、よく今まで生きてたなつて思つてな……」

そう答える俺の疲れきつた表情を見て納得したのか、黙って頷きそ  
のまま体重を俺に預けてきた。

まあ、もう分かつていると思うが、今の俺は人の形を取っている。

出来る様になったのは、もう大分前の話だ。

普通、こう言う転生物では、イケメンに生まれ変わるのがテンプレなんだろうが、残念ながら俺にそんな幸運が訪れる訳も無く、人間として生きていた頃と殆ど変わらず、特徴の無い地味な顔立ちと、身長は百七十行くか行かないか程度で中背中肉の日本人として平均的な体格。昔と違うと言えば、髪が膝裏に届くぐらいに伸びた事と目付きが若干悪くなった事ぐらいだ。

髪は後で一つに縛っているが、邪魔だ。正直、切りたいんだが、ラファが切らせてくれない。何でも、綺麗だから勿体ないとか。男の髪が綺麗でもなあ……と、ここから出たら切ろうと隠れて決意していたりする。

まあ、目付きは地味な顔に特徴が出来た、とポジティブに考えているから気にはしていない。と言うか、主に修行の所為で気にする暇が無かった。

人の形を取れる様になった事を筆頭に、幾つか修行の成果と呼べる物が出来たから、修行も無駄ではなかったのかもしれないが、神のお蔭かと思うといまいち釈然としないものがある。

さっき言っていた「俺がもう死なない」と言うのも、修行によりある程度だが『肯定と否定を操る程度の能力』を使いこなせる様になり、俺の肉体から『死』と『老い』の概念を『否定』している。塵一つすら残さず消え去ったとしても、妖力さえあれば再生するのは、主に神との修行で経験積みだ。

なんか、思い出して鬱になってきた……、と、トラウマスイッチが入る直前に、神がこつちをニヤニヤしながら見ているのに気付いた。

「……何だよ」

「いやあ、ふと思ったけど、アヤシ君ってロリコン？」

こ、こいつ、今の状況で言うてはならない一言を……！！

ラファを足の上に乗せ、頭に手を置いている状況で言っても全く説得力は無いが、俺は断じてロリコンではない。そう、断じて違う！これはあれだ、年の離れた妹を可愛がるとかそんな感じだ。

「確かに全く説得力がないッスね」

と、後から聞きなれた声がする。

「……いつからそこにいた」

「さつきからッス」

そこにいたのは、人に化ける事によって、今まで万人受けする見た目だったのが、ごく一部のお姉さまとかそら辺の人達に大人気だろう見た目にクラスチェンジしたクルミだった。

癖っ毛混じりの栗色の髪、クリクリとした黒い瞳に童顔、小柄な、と言うか普通に小学生ぐらいに見える体格、と。まあ、簡単に言えばショタコンの人に狙われまくるであろう見た目になっていた。

どうも、クルミの方は今日の修行は終わったのでこちらに来たらしい。ミカさんことミカエルとウリくんことウリエルが修行を見ていたので、無理なくこなせるメニューなんだと。

まあ、ミカさんは天然でウリくんは口悪いけど、二人とも常識弁えてるからな。……羨ましい。

「じゃ、そろそろ修行再開しよか」

そう言つて、神が立ち上がるのを見て、俺はゲッソリした。

ああ、また地獄の扉が開くのか、と。あ、因みに地獄の主ことルシファーはシスコンだったが、基本的にいい人だった。神にはヤンデレだったがな。是非ともN? c e B o a tな展開になる様に頑張っ

て欲しい。

「スターライト、ブレイカーアーーーーー!!」

ああ、今日はリリカルな魔法少女か、と既に回避を諦めた俺は、そんな事を考えながら原作の数十倍の太さはある光の奔流に飲まれていった。

と言うか、ネタ技に『否定』を無効化する様に細工するのは卑怯だと思うんだ。

この時、俺達がここに来てから約千年。俺が元いた時代から六千万年程前の話である。原作は、まだまだ先の様だ。



## 狼と千年（後書き）

今回は独自解釈満載の話でした。次からは一気に時間を跳ばすつもりです。紀元前数百年ぐらいまで。ついでに、ここでの生活は番外編かなんかで書きます、多分。神とその仲間達の出番はまだありますし。さて、次は何だろうな……。

ああ、ゴールデンウィークが終わる……。

感想や誤字脱字報告があればお気軽にどうぞ。それが作者の糧となります。

## 狼と死合と恋愛？（前書き）

さあ、毎度お馴染みの前言撤回だ！！今回もオリキャラしか出てこないよ！！

# 狼と死合と恋愛？

「戦鬪狂がつ！いい加減当たれ！！」

「アハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハッ！！」

叫びを上げながら宙を舞う二つの影。

片方は徒手空拳。輝く様な金髪をオールバックにした背の高い男

神。その顔には愉悦、どうしようもなく今の状況を楽しんでいる様な無邪気な、だがどこか狂気をはらんだ満面の笑みが浮かんでいる。

対するは右手に身の丈ほどの鋼の斧剣を持った長い漆の様な黒髪を  
後で縛った中背中肉の少年 最近になり名をアヤシから改め

た否月妖始。ひづき あやし男とは対照的に、その顔は苦渋の色が濃い。

妖始の手に握られた斧劍が神に向かつて振るわれる。その身の丈ほどの鉄の塊を振るっているとは微塵も感じさせない動作は、常人どころか例え英雄と呼ばれる相手でも間違ひなく両断せしめるだろうが、彼の目の前にいる相手はこの世界における人外筆頭。常識？何それおいしいの？

「ハッハア！！」

ソニックブーム  
衝撃波すら巻き起こし迫る斧剣を、神は笑い声を上げながら真つ向から拳で弾いた。

「ゲツ!？」

余りに常識外れな対応。

どう言う思考回路をしているのか、神は音速以上で振るわれる斧剣

に対し、回避ではなく相殺と言う選択肢を選び、あまつさえ打ち勝ってしまったのだ。それがどれだけ異常な行為かは想像に難くないだろう。そして武器を弾かれ完全に無防備になってしまっている妖始に、追い討ちの拳が放たれる。

「うおつとー！」

だが、妖始もまともではなかった。

武器を弾かれ、体が硬直している状態で放たれた避けられるはずのない一撃。それを、妖始はその場で掻き消える様に更に上へ跳ねた。この二人、何だかんだ言って十分人外である。

「ほのすそり火闌降ー！！」

神の宣言に従い、無数の火柱が発生する。触れるどころか、近付くだけでも焼け焦げてしまいそんな高熱が空間を支配する。

だが、そんな中でも妖始の動きが制限される事はない。『肯定と否定を操る程度の能力』により火柱の影響を全て『否定』、悪くなつた視界は嗅覚によりカバーし三次元的な空間を跳び回る。まるで足場があるかの様なその動きは飛ぶ、と言うよりも跳ぶと言う方が正しい。

超高速で動き回りながら斧剣を振るい続けるが、それを神は衝撃波ソニックブームすら読み取り、未来予知の様な精度で全ての攻撃を紙一重で回避し、タイミングを狙ってカウンターを叩き込んでいく。

「ッー！！」

神の拳が妖始の頬を掠め、その余波により頬に口の中まで届く切り傷が出来るが、妖力を使い一瞬で再生させる。だが、たった一瞬ではあるが、そこに出来た明らかな隙を神が見逃すはずも無い。

「うつついらい 顕斎」

至近距離にいた神と妖始の間に見えない壁が発生し、妖始を吹き飛ばす。そして、そこで攻撃の手を緩めるほど神は甘くもなく、当然更に追撃が加えられる。

「はらえ 解除！！」

前に突き出された右腕から巨大な衝撃波が無数に打ち出され、その全てが高速で妖始へと飛翔する。吹き飛ばされた直後で体勢が整っていなかった妖始は、なす術も無く全弾に命中。弾幕の余波により辺り一面に爆煙が舞い。

「射殺す百頭　　！！」

止めを刺そうと接近していた神に、全方向から九つの斬撃が襲う。

「ハハッ　　！！」

だが、それすらも紙一重で避け切ってしまう。神から漏れる笑いは自らの予想を超えた相手への喜び。神は殺し合う度にさまざまな策を考え、強くなり続ける妖始とのこの時間を明らかに楽しんでいた。それ故の笑み。

そして、全力で技を放ち、今度こそ動けない状態の妖始に、止めとなる技を放つ。

「まろかれ 混」

一瞬の閃光。そして、その後には、ボロボロになり地に伏した妖始と、それを見下ろす無傷の神が残っていた。

否月妖始連敗記録七桁の大台に乗った瞬間だった。

「あの野郎、しこたま当てやがって……」

最近ではお決まりになってきた午前中の全力での殺し合い

もとい、一方的な虐めから数分後、体を再生し、次の殺し合いに向けて策を考える。

今回の射殺す百頭はかなり自信があつたんだが、あれで当たらないとなると……つつか完全に不意を付いた筈の攻撃すら完全に避け切るって、それ何て最強の悪魔憑きだよ。……本当にパロってないよな？あれの精神構造を神が真似するのは洒落にならない。

「大丈夫、だよな……？」

あれ？かなり不安になってきた。実際、あいつは未来予知に近い形で俺の攻撃に反応してくるから……別に一秒先の地獄を想っていても何ら不思議じゃない。万が一、そうだった場合はますます俺の目標　一撃ブチ当てる、が遠くなってしまう。

「ん、次はどうするかなあ」

目標は高い方がいい、なんてよく言うが、俺の場合は一番低い所で既にエベレスト並だ。登る方の事も考えて欲しい。

妖怪の肉体と、それなりに生きた事で大きくなった妖力のお陰で大抵の事なら再現出来る様になってきたが、それでも神に一撃当てる事すらままならない。

そんな事を心の中で愚痴りながら、傍らに置いてある自分の得物ふけんに目を向ける。

この斧剣、ここの倉庫で発掘して以来、概念操作と言う改造に改造を重ねた自重無しのかなりヤバい物だったりするのだが、それを持つても当たらないのは、流石に理不尽じゃなかるうかと思わないでもない。『必中』とかの概念も付けてる筈なんだけどなあ……。

「いつその事、避け様とする意思を『否定』する様にするか？……でもなあ、普通に無視して動きそうだし……時間停止　　は駄目だな。あいつは無視して動く。ならキングクリムゾンに多重次元屈折現象で射殺す百頭をブチ込むか……？」

ブツブツと新たな神対策を考えていく。

普通に考えればオーバーキルどころではないが、残念ながらここには常識人はいても普通の奴はいない。全員漏れなく人外だ

つと、誰か来たな。

「つたく、よくやるぜ。毎回ボコられてまだ懲りねえのかよ」

そう言いながら、俺の隣に腰掛けるウリ君ことウリエル。

「違うな。毎回ボコられてるから、次こそボコる為にやるんだ」

そう反論すると、ウリ君は理解できねえ、と肩を竦めた。

ウリエル。

『神の光』や『神の炎』を意味する名を持つ大天使の一人。作家と教師にインスピレーションを与え、裁きと予言の解説者と言う役割を持つと言われている。

その実体は目付きも口調も荒いが、天国で最も常識と良識を兼ね備え、裁きやら予言やらの他の奴らが面倒臭がつてしない仕事が行される苦勞人。

『あらゆるものを燃やす程度の能力』を持ち、よく神を火炙りにしているのを見掛ける。ここに来たばかりの頃、修行中に神の奴が力加減を間違えて俺を宮殿にぶつけ、怒ったウリエルに存在ごと燃やされ掛けたのは今はいい思い出だ。当時はマジで死ぬかと思ったが、ついでに、クルミの師匠であり、俺が暇潰しで始めた絵を偶に助言を呉れたりもする。まあ、俗に言うヤンデレ。病んでる方じゃなくてヤンキーの方の。病んでる方はルシファーだけで間に合ってる。

「で？どうかした？」

「んだよ。何か用事がなきゃここにいちやいけねえのか？」

俺としては、そう言う台詞は女の子に言って欲しいのだが……そんな女の子はいない？友人のハーレムにはいたぞ？ヤンキーなのに可愛い子が。その子関係で友人がゴタゴタに巻き込まれて、その後処理を俺がやらされたのはある意味テンプレ。地味キヤラのだけど。まあ、それは置いておくとして、ウリエルが俺のどこに来るのって用事がある時だけだった気がするんだが……。

「何だよ。別に修行中にガブリエルの奴が来たからコッチに来た訳じゃねえからな」

しばらくジトつとした視線を向けていると、相も変わらない不機嫌



そんな顔のままあっさりと自白しやがった。ちなみに、ここら辺が俺や神にヤンデレ、もしくはツンデレ扱いされる原因だったりする。だって、なあ？

で、何故ガブリエル 通称、ガブちゃんさんがウリエルとミカさんことミカエルがやってているクルミの修行に参加するとウリエルがこちらに来るのか、それは全て「ウリエルがツンデレだから」の一言で片が付く。まあ、詰まりはそう言う事だ。

まあ、天然ジゴロ、鈍感、一級フラグ建築士など（現実にいる奴のみ）を嫌悪する俺としては、こんな風に誰か一人に惚れている奴は見ていて微笑ましいのだが、残念な事にこの関係を数千年以上続けていると言っのだから呆れた物だ。ぶっちゃけ、相思相愛な筈なんだけどなあ……。

「……そろそろ戻るわ。じゃあな」

取り留めもない世間話や愚痴に花を咲かせ、それなりに時間が経つとウリエルはそう言って、そそくさとクルミの修行に戻っていった。多分、途中で抜け出したのを気にしてたんだろうなあ。何となく落ち着かない様子だったし。

「んゝ、どうするかなあ」

俺としては、もういつその事くっ付いてしまえばいいと思うのだが、こう言う事に部外者が口を出しても碌な事にならないのは経験済みだし。

本来なら、遠くから眺めてニヤニヤする筈なんだが、ぶっちゃけあの二人は見ていて面白くない。とは言え、弄るぐらいなら兎も角、仲を取り持つのは専門外。

「呼ばれず飛び出すジャジャジャァン！！」

「うおおおっ?!」

どつかで聞いた様な台詞と共に地面から何かが　　と言つか、  
こんな事する奴一人しかいねえよ!! 今時漫画でもない様な登場の  
仕方しやがつて!! 地面　　いや、雲だけど、突き破ってくん  
なよ!! 何だそのやり切ったみたいな顔は!?

「ふう……さて、あなたの願い、叶えてしんぜよ」

「はあ?」

地面から飛び出したかと思えば、何を言ってるんだコイツは。俺の  
願い? 強いて言えばお前に死んで欲しいって事ぐらいだが。

「うん、素で言われると結構来るもんやね……」

「何しに来たんだよ」

「スルー!?!」

知った事か。とつとと用件を話せよ。ルシファーにお前が別の天使  
に手を出したって言うぞ。

「あ、勘弁して下さい。いやマジで」

マジで頭を下げる神。……標準語になるぐらいヤバいのか。色々  
気にはなるが、知ったら戻ってこれなくなりそうな気がする。と言  
うか、ホントに何しに来たんだ。

「うん、ぶつちゃけあの二人見ててイライラするやる?」

あの二人            ウリエルとガブリエルの事か。って、ちょっと待て。お前まさか……!?

「と言う訳で、あの二人をいい加減くっ付けよう思ってた?」

「おい、やめろバカ!! と言う風に茶々入れるのが一番ヤバいんだぞ?!」

「……経験、あるん?」

「……察してくれ」

強いて言うなら若気の至りだ。

「でもなあ

」

何かを言おうとして口を閉じる神。コイツにしては随分と歯切れが悪い。何やらかしやがった。

「            もうガブちゃん焚き付けちゃった」

テヘッ、と自分で頭を小突いて舌を出す神。……このアホ、殺してやるつか。

「て言うかマジ?」

「マジマジ。部屋に待機してもらっとる」

ホントに何やってんのコイツ！？これもうあれじゃん、完全にウリエルに燃やされるフラグじゃん！！

「じゃ、出来る限りやってみよか」

「もう好きに                      おい、この手は何だ」

好きにしるよ、と言う前に俺の肩を掴む神。……ぶっちゃけ嫌な予感しかない。と言うか良い予感なんてした事がない。

「いやあ、やっぱこーゆー時は人が多い方がええやん？」

神は笑顔でそう言うが……

「本音は？」

「ウリくんからお仕置きされる時の道連れ」

ヤッパリかよ！！予想はしてたよ畜生！！

「離せ！！俺は関係ねえ！！」

「ハッハッハ。だ              が              断              る！！」

まあ、本気の神に俺が勝てる訳もなく、強制的に参加させられる事に……。

俺、今回の話が終わったら旅にでるんだ……。

「で、どうするつもりなんだ？」

所変わって、俺とクルミ（殆どラファも）も使っている部屋がある  
宮殿の中の一室　　神の部屋。その扉を開けると畳や日本庭  
園、ついでに鹿脅しがあったりする屋敷だった事には今更ツツコミ  
を入れたりしない。殆どは神だからで説明出来る。

集まっているメンバーは俺、神、ガブリエル。  
ガブリエル。

「神の人」「神は力強い」などの意味を名に持つウリエルと同じく  
大天使の一人。神の言葉を伝える天使であり、処女マリアにキリス  
トの誕生を伝えた受胎告知は余りにも有名だ。

絵では基本的に優美な青年として描かれる事が多いが、この世界で  
は女性。銀髪ポニーテールに吊り目の気の強そうな　　と言う  
か、気の強い美人さん。ある一部が少々アレかもしれないが、あれ  
だ、モデル体型って奴にしておこう。もし、それが原因で青年とし  
て描かれたのなら不憫過ぎる。本人も気にしてるのに……。

能力は『言葉を支配する程度の能力』。簡単に言えば言霊の強化版。  
運命や現実まで捻曲げる絶対的な暗示。最初に神の動きを止めたの  
もこの能力らしい。当時の俺の命の恩人。

「そやねえ……ボクと妖始君が出していくアイデアをガブちゃん  
が実行する言うんはどーや？」

まあ、確かにガブリエルじゃ思い付かないから神の怪しすぎる口車  
に乗ったんだろうし、コイツにしてはなかなかマトモな案だと思う。  
思っけど……逆にマトモ過ぎて怪しい。

「……けど、それぐらいしかないか……」

だが、いくら怪しかろうと死亡系統のフラグが立っていようと、他に案もない。……取り敢えず、コイツが何か仕出かそうとしたら止める事にしよう。

「……そうね、デミュウルの言う通りでいいわ」

神の奴の案に乗る事に物凄い葛藤があつたのか、俺が頷くのを見てガブリエルはその整った顔を顰めながら、賛同した。と言う事で、神の悪ふざ　　もとい、恋愛相談が始まった。……と、その前に一つ。

「デミュウルって誰？」

「えっ」

「あれ、言つてへんやつたっけ？」

……神の本名はデミュウル（自称）だった。

برانその一。発案者、俺。

「一緒に飯でも食いに行くつてのはどうだ？仕事はもう終わってるだろうし、酒でも飲ませたら変化あるかもしれないし」

と言う事で、ガブリエルにウリエルを食事に誘わせてみた。

『あ、ウリ。えっと、ご飯でも一緒に食べない……？』

『いや、俺もう食ってきたから』

……ドンマイ。そしてすまない。その可能性は考えてなかった。ついでに勇気を出して誘ったのに断られて落ち込むガブリエルを慰めるのが大変だった……。

プランその二。発案者、神      ことデミユウル。

「ハツハツハ、アホやなあ妖始クン。ええか？こう言っくんは本能に訴えかけるんがええんやで？」

そう言っデミユ      何か格好良くてムカつくから今まで  
通り神でいこう。神が取り出したのは      。

『……………』

ガブリエルに先程の服を着せ、ウリエルの部屋に待機させる事数分。その間、俺と神はずっと部屋の天井裏に潜んでいるのだが……いい加減帰ってもいいだろうか。

ガチャ      。

と、真面目にこの企画から逃げ出そうかと考えていた時、扉が開かれ、部屋の中で顔を真っ赤にしたガブリエルの全力の一言。

『お、お帰りなさいませご主人様！！』

キィ、パタン。

……多分、ウリエルには部屋の中の状況が理解出来なかったんだろうな。俺も、部屋の中にメイド服を着た知り合いがいたら同じ事をすると思う。

そう、メイド服だ。黒い服に白いエプロンドレス、更にミニスカート。頭の上にはフリルのついたカチューシャ。そんなもん着た知り合いがいたら誰だって扉閉めるわ！！

おい、神。お前この状況予想してただろ。声我慢して笑い転げてんじゃないねえ。最初っからこれが狙いだっただのかよ……。

ガチャ

。

『お、お帰りなさいませ

』

パタン！！

そしてウリエル、いい加減に認める。現実だから、それ。

『……何してんだよ、お前』

ウリエルは僅かに扉を開き、中を確認する様にそこから顔を覗かせている。

『えっと、これは……その……』



「チイツ、煮え切らへんな。もういつそ告白してまえばええのに」

おい、サポート云々言ってたのはどのどいつだよ。こんな状況に投げ込みやがって。と言うか、プランその二で終わっちまうじゃねえか？この流れは……。

『上のお前らもだ』

「……………」

ばれてる？え？何で？少なくとも気配を誤魔化して結界まで張ってたのに……。

「あつ、この宮殿の部屋は持ち主には侵入者が分かる様にしとるんやった」

「そんな大事な事忘れるんじゃないぞ！」

しもた、なんて呟きながら眉間に皺を寄せる神を、ばれてるならわざわざ声を潜める必要も無いだろうと

思いつ切り怒鳴り付けた。本当に何考えてやがるんだよ、こいつ

って、一寸待て。

「俺、そんな機能聞いてないぞ」

「ああ。うん、君の部屋には付いてへんよ？ラファがちよくちよく行くやろうと思つて」

ありがた迷惑だこの野郎。と、見方によっては、と言うか、どう見

てもいつもの漫才をしながら二人して天井から下りる。そこにいたのは、錯覚でも何でもなく、マジで炎を背負ったウリエルだった。……ジーザス。

「で？ガブリエルの奴は今日は一日、何か様子が可笑しかったが、手前が原因か」

そう言いながら神との距離を徐々に詰めて行くウリエル。

手前ら、ではなく手前、と言う所に普段の行いの差が出ていると言つても過言ではないだろう。普段から人に迷惑ばかり掛けてるから、こう言う、少しは巫山戯<sup>ふざけ</sup>ていたにしろ、ガブリエルのために行動しようとした時にまで原因扱いされるんだよ。疑問系じゃなくて断言したからな。

「いや、えつと……その、な……」

流石に告白だの云々だのを言う訳にはいかないと思ったのか、神も事情を言うに言えず、ジリジリと後ずさる。

さて、その状況で俺はと言えば

「実は、俺達神の奴に脅されて……！！」

「ちょ！？そこはガブちゃん説得してボクを助けるゆー流れちゃうんかい！！」

「ハッ」

「鼻で笑われた！？」

俺が神を助ける？バカ言っちゃいけない。俺はコイツに怨みは有っ

ても借りは殆ど無い。全く、とは言い切れないのがアレだが、その割合は俺の個人的な換算で言えば『怨み：借り〃百：一』程度だ。まあ、どうせ死ぬ事もないんだし、別に見ていても構わないだろう。

「ウリ、待つて!!」

と、俺が完全に傍観体勢に入った辺りで、今にも神を火炙りにせんとするウリエルをガブリエルの声が止めた。

「今回は……今回に關してだけは、主が悪い訳じゃないの」

多分、無意識だろうが『今回だけ』と言う部分を強調して言うガブリエルを見て、神は安堵と悲しみが混ざり合った、何とも言えない表情を作り上げていた。まあ、無意識に、って言うのが尚の事傷付いたんだろう。

「なら、何でお前はそんな格好してんだよ。神に唆コイッされたんじゃないねえなら、何だつてそんなもんを……」

「そ、それは……私が、私が……」

顔を赤らめて俯いてしまったガブリエルを前に、訝しげな表情をするウリエル。と言うか、何だこの展開。何でいつの間にかイベント発生してるんだよ。

この展開はアカシックレコードを使っていない神には予想外だったのか、状況に付いていけないと言う風な顔をしている。かく言う俺も似たような表情をしているだろうと思う。

だって昨今漫画でも見ない様な流れだぞ？この流れに見事に付いて行ける奴がいるなら出て来い。

未だに少しばかり俺の脳が暴走している間に、ガブリエルは決意が

固まったのか、キツと顔を上げた。

「私が、ウリエルに嫌われてると思って!!」

『（日和<sup>ひより</sup>った!!）』

内心で愕然としている俺と神を余所に、二人の会話は加速していく。

「……別に嫌っちゃいねえよ。つつか、そんな事のためにそんな格好したのかよ」

「ち、違っの!!い、今の間違い!!」

「はあ？」

「わ、私は……私は!!」

と、俺達が聞いたのはここまで。流石に、これ以上聞くのは野暮だろうと思い、神にアイコンタクトで意思の疎通を図ると神も同じ事を考えていたのか、浅く頷き返した。そして、俺達は二人が会話に集中している間に、そつと部屋を後にした。

結局、ガブリエルが告白出来たかどうかだが

「ねえ、今日一緒にご飯食べない？」

「別に構わんが……」

「エヘヘ」

と、嬉しそうに笑いながら腕を絡めているガブリエルと、鬱陶しそうに、でもどこか満更でもない様な態度で返事をするウリエルノ様子を見れば、結果がどうなったかは一目瞭然だろう。

そんな様子をボーっと、いつもの様にラファを胡坐を掻いた足の上に乗せたまま、遠目で眺めていると、隣に背中に黒髪の、どこも無くミカエルさんに似た雰囲気を持った巨乳の女性　　ルシファ―を背中に貼り付けた神が座ってきた。互いに何を言うでもなく、暫し、何をするでもない時間が流れていく。そして、仕事をしているウリエルの背中に抱きついていているガブリエルを見ながら、俺と神は全く同じタイミングで一言呟いた。

『人前でいちゃついてんじゃねーよ』

『アンタらが言うな！！』

働いている天使達は総ツツコミだったそうなの。



## 狼と死合と恋愛？（後書き）

はい、本当にすいません。今回の話、本当は冒頭の戦闘描写をメインにする予定だったんですが、それだけだとどうしても字数が足りず、それでふと思い付いたオリキャラについての話でもやろうかと。そんな話が今まで出—番字数が多いのは秘密ww

そしてしれっと神の本名登場。付けつもりは無かったんですが、某会議室の流れでいつの間にか……。ついでに神が使った技は皆大好きK Fやm genの『地 意思』さんから。でも、規模はダンチww

ちよつとした神の設定補足。神〃全並行世界の地球。取り敢えず、どこかに無事な地球があれば死なないとか。当然アカシックレコードの閲覧も可能。何を思ってこんな設定にしたし……………。

誤字脱字や感想があれば是非！！それが作者の糧となる！！

次回こそ、次回こそ原作キャラ出しますから！！

狼と祟り神。実は幼女（前書き）

先に言っておきます。作者は西尾維新と奈須きのこが大好きです。

七月二十日、幾つか表現方法を改変。

八月二日、烏氏の活動報告を見て髪の写真について確認した所、書き忘れていた事を発見。急遽追記。



## 狼と祟り神。実は幼女

日が高く昇り、燦々と温かい日差しが降り注ぐ今日この頃。

そんな中を、黒髪の、ちよつとだけ、ほんのちよつとだけ目付きは悪い、中背中肉の地味と言っても過言ではない少年　　俺、こ

と否月妖始ひつきあやしは、バツサリと髪を切った事で頭が随分と軽くなったのを感じつつ、数千万年ぶりに踏む大地の感触を下駄越しに味わっていないながら、襟元を緩くした白い袖広の着物に、それとは対照的な黒の袴と言う出で立ちで風を切つて悠々と歩いて行く。

この着物は人型になった時に新調？と言うか能力で仕立ててみた…のはいいが、この時代にこんな服ねえよって事に気付いたのはもつと後だったとき。それから開き直つて着続けている。

今は紀元前十数年と言った所。人も多くなつてきたし、と言う事で神の野郎から旅をする許可を得たのがつい一週間ほど前の話。それから、風の向くまま気の向くまま行く先々で絵を書いて回ると言う宛のない旅に興じていた、と。

まあ、絵とは言つても天国にいた頃に暇潰しで始めた物で、ウリエルからは一生二流との評価を頂いた程度の物だ。流石に芸術を司るウリエルから言われてしまつて大分落ち込みはしたが、今はどうでもいい話だろう。

兎も角、そんな旅をしていた折、道中知り合つた人間の男からなかなか興味深い話を聞いた。

俺が今歩いている道は周りにはそれなりではあるが人通りがあり、この時代では十分賑わっていると言える。そして、この道が続く先にある物は一つ。その物こそ、男が一見の価値あり、とわざわざ俺に勧める程の物であり今の時代、この地域では知らぬ者はいない建築物。

その名を

『洩矢神社』と言う。

今回は、しがない旅の絵描きとなった俺と、現在において最大の勢力を誇るミシャグジを一手に率いる少女との話だったりする。

「とは言え、どうしたものか」

あれから十数分後、俺は件の洩矢神社に到着していた。してはいたが……。

「入る訳にはいかんよなあ……」

そう、未だに俺は境内には入ってなかったりするのだ。

実を言くと、大昔にあのバカが言った通り、今の俺は訳あって半ば神格化してしまっている。半分は神になっているとは言え、いや、むしろ半神半妖と言う何とも言い難い種族になっているが故に、神社の敷地内にズカズカと入る訳にはいかないのだなあ、これが。

流石に神力の方は能力で隠しているが、中に入れば感知されるだろう違和感からただの妖怪じゃない事ぐらいはバレるだろうし、神つて奴は基本的に縄張り意識が強い。妖怪なんぞが境内に入れば「ヒヤッハー汚物は消毒だー!」と、世紀末のモヒカンの如く飛んできると。同じ神だろうと他文化の神であれば扱いについては大して変わらない。強いて言えば一方的な消毒から「よろしい、なら

ば戦争だ」へ変化する程度だ。まあ、民から信仰を集め、それを守る為には多少排他的になるのも仕方ないのかもしれないが。

何が言いたいのかと言えば、そんな所に妖怪でもあり神でもある俺が入るのは争いの種を蒔くだけで、平和で長閑な旅を望む俺としてはそんなものはごめんである。まあ尤も、この神社、石段なんかがある訳でもないので、敷地に入らなくても絵が描けるんだが。

「じゃ、始めるか」

能力で空間に穴をこじ開け、大分前から倉庫代わりに活用している空間からカンバスや筆なんかの道具一式を取り出す。

この空間、あらゆる概念が存在せず、あのバ力ですら干渉出来ないビックリな空間だ。どんなに物を入れても問題ないし、概念がないだけあって入れた物はその状態から全く変化しない。何とも便利極まりない代物だ。何の力も持たない一般人が見ると発狂しかねないと言つのが欠点と言えば欠点だが……正直、俺も何でこんな空間に繋がられるのが今一つ分かってないのだ。本当に謎の空間である。まあ、そんな事はおいておくとして、あくまで他人の邪魔にならず、尚且つ鳥居の前と言う場所を探して、能力で周りからの認識を『否定』すると地べたに座り込む。

最初にやるのは下絵作り。下絵から始めるのは些か時間が掛かるが、これ以外のやり方じゃ書けないんだから仕方がない。

（取り敢えず、今日は下絵を完成させたら宿を探そう。この分だと完成までに何度か通う事になるだろうし、その期間中泊めてくれる所を探さなくきゃな。……いや、待て。そんな所あるか？もしかして野宿？まあ、それでも困らないし、どうとでもなるか……）

簡単に今後の予定とも言えない様な物を立てつつ、改めて神社に目を向ける。

それで思ったのだがこの洩矢神社、今の時代にしては立派な建物だ。二十世紀の神社に勝るとも劣らない規模、何もない普通の日に集まっている人数を考えると、未来よりもずっと栄えていると言えるが……。

（いや、そりや当然か）

と、先程までの考えを自分で否定する。

未来の、特に日本では神なんかは迷信とされ、神社には全くと言っていいほど人が集まらない。集まるとすれば正月や冠婚葬祭の時ぐらい、か。

（当時は気にしちゃんかったが、今思うとなかなか寂しい物があるな……）

しばらくはそんな取り留めのない事を考えなが筆を動かしていたのだが、ふと何やら視線を感じ顔を上げてみればいつからそこにいたのか、一人の少女が鳥居の向こう側にしゃがみ込んで俺の方を眺めていた。

金の髪を肩に掛かる程度で切り揃え、白い襦袢の様な袖口が広くなっている白い着物と、その上に袖の無い紫の衣を重ね着し、下は上と同じく紫色の、何故かミニスカートの様なヒラヒラした造り……時代に合わせていないと言うか奇妙と言うか、何とも言えない独特な服装である。更によく見れば、紫の衣には蛙の様な刺繍まで施されている。

金髪に蛙の刺繍が施された服装……神社関係の渡来人か何かだろうか？

俺にとってはラファエルやデミュウルの奴で見慣れた物ではあるが、金髪は今の日本ではそんなに見られる物じゃないし、少なくとも純粹な日本人では金髪はありえない筈だ。

とまあ、そんな風に観察していれば当然なのだが、少女と目が合ってしまった。それも、そらせない程バツチリと。

「……………」

交差する視線。そして何とも言えない気まずい沈黙。……どうしよう。

「ねえ」

「ん？」

どうやってこの状況を打破しようかと頭を働かせていると、ありがたい事に少女の方から声を掛けてきてくれた。

年下に気を使わせた様でいろいろと情けない様な気もするが、改めて考えると、残念な事に俺は元々こう言うヘタレキャラだったので気にしない事にする。

「そんな所で何してるの？」

何って、そんな事見れば……ああ、そう言えばこの時代にこんな道具はないんだっけ。今まで聞かれた事なかったけど……そりゃ、流石にカンバスの方を見れば分かるか。今まで皆物珍しそうに覗き込んでたし。

「絵だよ」

「絵？」

「ああ。大陸の向こうの道具だな。これで絵を描くんだよ」

未来のだけど、と言う言葉は、会ったばかりでそんな事言っても残念な奴だと思われるだけだと思って心の中に留めて置く事にするとして、筆をクルクルと回しながらそう返すと、少女はへへ、と物珍しそうに俺の道具を眺め始めた。

まあ布に絵を描くなんて発想はないよなあ。何より勿体<sup>もったい</sup>無いし。

「何を描いてるの？」

と、聞かれたので何も言わずに筆で神社を差しながら、今まで書いていた下絵に目を通す。

（んー、構図がずれたか。線も歪<sup>よ</sup>じまったし、書き直す……いや、いつその事スケッチからやるか？）

途中まで書き上げた所為で多少勿体無い気もするが、ウリエル曰く、こう言う物は妥協してはいけないらしい。

まあ時間もあるし、俺としては別にどちらでも構わない。と、言う事で絵の師匠の言葉ぐらいいは聞こうと思い、先程取り出しておいた道具の中から鉛筆とスケッチブックを引っ張り出し、再び作業に取り掛かる。

「上手いもんだね」

「失敗だけだな」

トテトテと俺に近付き、地面に置いたカンバスを覗き込みながらそんな事を言う少女に苦笑いしながらそう返す。

近くに来た所為で思ったのだが、この少女、思ったよりも小さい。  
未来で言うならば小学生、どう頑張っても中学生……いや、中学生

も無理だな。表現としては少女、と言うよりも童わんや幼女なんかの方がシックリ来る。

ラファエルと言い、どうも俺は幼い金髪の少女とは縁があるらしいが……どうせならもう少しばかり大人っぽい女性とも出会ってみたい物である。

昔から子供には好かれていたが、まさかこっちに來てからも継続とは思わなかった。これはこれで一種のフラグ体質なのかもしれないが、俺はロリコンじゃないのでありがたみはない。皆無と言ってもいい。

「ふん。でも何でこんな所で書いてるの？」

中に入ればいいのに、と少女は顔を絵から俺に目を向け、不思議そうな顔でそんな事を尋ねてくるが……それは流石に白々し過ぎないか？それとも本当に俺が境内に入る事の意味が分かってないのか？

「まあ、ちよつとした事情があつてな。神様に嫌われてるんだよ」

尤も、これぐらいの子供なら神と妖怪の確執を知らなくても不思議はない。ならば、わざわざ俺が教える必要もないだろ。だが、だとするとこれ程の力を持った子に何も教育しないとは、洩矢の神はどう言つつもりだ？

俺は別に力を誇示している訳ではない。むしろ妖力や靈力、神力は隠している。だが、少なくとも能力で種族を弄らなければその類の関係者には俺が妖怪だと言う事ぐらいは普通に感知されるだろう。洩矢神社にいて、僅かにだが力を持っているなら十中八九巫女か、はたまたその親族か。どちらにせよそんな子供が妖怪である俺に警戒もなく近付くとはなあ……。

巫女の教育は神や神職の仕事だろうに。そんな子供、妖怪からすればいい力モだ。いや、それとも自分に喧嘩売る様な奴はいないとか

言う自信か？もしそうなら尚の事境内に入りたくない。絶対に面倒な事になる。

「喧嘩でもしたの？」

首を傾げる少女の、何も知らない純粋な言葉に思わず苦笑いが漏れる。

大陸側の神には大抵喧嘩売った　　いや、主おもに売らされたが、日本の神にそう言った事はしていない。単純に妖怪だと言うだけだ。尤も、それでも妖怪なんぞ受け入れる物好きな神なんぞいないだろうが。

「大丈夫だよ！ここの神様は優しいから！！」

だと言うのに、少女はそう言って朗らかな笑顔を浮かべると、俺の絵描きの道具を纏めて抱えて鳥居の中に入って行ってしまった。

「……は？」

流石に予想外の展開に呆然。鳥居の向こうには笑顔を浮かべて「早く早く」なんて言っている少女。

「……え？マジで？」

別に道具は能力で作り直せるが、どこか別の所に行こうものなら絶対追って来るよなあ、あの子。

「……仕方ないか」

神様が優しいのは基本的に人間だけだ、と言うのは口に出さないで



おく。

わざわざ子供の夢を壊す事もないだろう。それに、あの子に会ってしまったのが運の尽きだと思い、諦めの感情から来る溜め息を一つ吐いて、ゆっくりと立ち上がる。

そして俺は鳥居へ        ずっと俺を見てニコニコと笑みを浮かべている少女の方へ向け、足を動かし始めた。  
取り敢えずは        。

「話の分かる神だいいなあ……」

鳥居を潜った瞬間に襲われる事が無い様に祈っておこう。勿論、神<sup>デミユウル</sup>ではなくお世話になった閻魔様に。  
そんな事を考えながら、俺はもう一つ溜め息を吐いた。

「ちょっと待っててね」

数分後、少女は俺を神社の裏手にある生活スペース        母屋とでも言えいいだろうか        に連れて行くと、そう言って縁側から中に入ってしまった。……俺と先程まで抱えていた道具を置いて。

取り敢えず、境内に入った瞬間に攻撃を受けなかった事に安堵しつつも、俺一人きりと言う神からすれば絶好の好機になってしまっている今の状況に冷や汗を流す。

何が怖いって、ここで逃げ仰せても日本にいる限り狙われ続けそうなのが怖い。

神って奴は大概敵には容赦がない。もしそんな事態になれば俺の周りにいる奴らすら巻き込むだろう。だとすると、あの少女には悪いが洩矢をここで殺しておくべきかも、なんて物騒な事を考えながら思考を入れ替えていく。

話は変わるが、俺には長い間生きた恩恵の一つに、マルチタスク分割思考と言う物がある。その名の通り、同時にいくつかの思考をこなすスキルだが、俺は普段、このスキルによって三つ程に思考を分けている。

一つ目は今の、所謂日常的な思考。二つ目は物事に対して是か否かを選び、創造の為の設計図を作る能力専用の思考。そして、最後に。

グシャッ

！！

……  
こう言う奇襲すらも想定した、戦闘用の思考。

見れば、つい先程　一秒前まで俺がいた場所には、見上げる程の、白くしなやかな印象を受ける大蛇が地面に喰らい付いていた。恐らくは、この大蛇が自然を依り代とした土着神　ミシヤグ

ジ……！！

やはり、あの子がいない時を狙って来たか。余程あの子の事が大事  
いや、違うのか？ああなるほど、そう言う事か。うわ  
あ、やってられねえ……。

「あー、言葉は通じるか？取り敢えず、俺に交戦の意志はないから引いて欲しいんだが……」

事の真相に気づき、元から少なかったやる気がゼロ通り越してマイナスになるのを感じながら交渉に打って出るも、返ってきたのは当

然の如く大口開けた大蛇の巨大な牙。

「聞く耳持たず、か……」

凄まじい勢いで飛び掛かって来る大蛇を、溜め息一つと共に地面を蹴って回避。それと同時に第二思考で頭きおくの中から設計図を引っ張り出し、地面に着地するのに合わせて能力を発動する  
！！

「『創造・存在肯定』」

ザザザザザ

ッ！！

創造は決してドイツ語とかじゃないからな。コレは能力であって聖遺物ではありません、と。

さて、戯れ言は置いておくとして、俺の前には先程の大蛇が蜷局とくろを巻いている。ただし、葛籠くわろう型の鋼鉄の檻の中で、だ。

「

」

檻に閉じ込められた大蛇は不気味な程に大人しく、見方によっては戸惑っている様にも見える。まあ、それもこの檻にはそう言う仕掛けをしているから当然なんだが、その前に。

「そろそろ出てきたらどうだ？」

檻に閉じ込められている大蛇、その奥の母屋の陰に向けて声を掛ける。そこからヒョッコリと顔を出したのはさつきまで一緒にいた少女。だが、その頭には先程まではなかった藁か何かで編み込まれた奇妙な形の      デフォルメした蛙の様にも見える帽子を被っていた。……マジで何だアレ。いや、本当に帽子か？

「あーうー、いつ気付いた？」

「……コイツが出てきた時から」

声を掛けられた事をキツカケに意識を帽子から外し、コイツの部分でミシャグジに親指を向けながら少女に答える。

まったく、と今日何度目になるか分からない溜め息を吐いてしまう。  
だが、それも仕方ないだろ。まさか。

「お前がこの神とは……なあ、洩矢サマ？」

俺の言葉に童姿の祟り神は、まるで悪戯に気付かれた子供の様な、実に愉しげな笑顔を浮かべた。

「そもそも、私の国に入ってくる妖怪って珍しいんだよね。十把一絡げの連中はまず近寄らないし、たまに来るのは力を過信して国で暴れようとする奴だしさ。でも、貴方は違うでしょ？とんでもない力を持っているのに何をするでもなく、ただ絵を書いてるだけなんてさ」

「それで興味を持って観察していた、と？」

「そうだよ？」

あっけらかんと言いつ少女  
た表情を浮かべてしまう。

洩矢諏訪子<sup>もりや すわこ</sup>を前に、俺は呆れ

今、俺達がいるのは、つい先程俺がミシャグジに襲われた庭にある  
縁側。そこで、俺は洩矢<sup>み</sup>について先程まで行われていた茶番について  
の説明をさせていた。

簡単に事の顛末を纏めれば、洩矢が王を務める国 諏訪王国

に妖怪<sup>おれ</sup>が入り込んだのを感知、その後監視していたが、その今までの  
妖怪とは違う行動に興味を引かれ、神社の近くに來たのを期に自  
ら接触。更にミシャグジに襲わせて実力を試した、と。

結局の所、最初から仕組まれていたと言う訳だ。まさか、一つの国  
全てに力が届くとは思わなかったが……流石は洩矢と言ったかね。

「じゃ、次は私の番ね。私も貴方には聞きたい事があるんだ」

「……まあ、ある程度ならな」

一通り説明させたんだ、こっちの事も説明すべきだろう。……聞か  
れた事だけ、な。

「貴方は何？」

「……………」

おいおい……随分と直球に聞いてくるじゃないか。まさか一番初め  
の質問でそう来るとは思わなかったぞ。まったく、洩矢には驚かさ  
れてばかりだ。

「妖怪だよ。分かってるだろうに」

「嘘だね。さっきのミシャグジ閉じ込めたアレ、能力でしょ？アレを出す時に僅かだけど神力を感じた。……それはどう説明するの？」

……能力を使うと神力が漏れるなんて、俺も知らなかったぞ？アレか、普段力を隠す事に能力を使っているから別の対象に能力を使ううとする力を隠している方から幾つか力が割<sup>さ</sup>かれてる、とかか？……今後の課題だな、コレ。

それよりも、どうするかなあ。神力がばれてる時点で下手な言い訳や誤魔化しの類は使えなくなったなが……いや、もうどうでもいいか。何と言つか、隠すのが面倒になってきたし。

「まあ、半分ほど神だからな」

「ふーん……」

と、言う訳であっさりカミングアウトするが、洩矢にそこまで驚いた様子は無い。

神力を使うと言う時点である程度予想を立てていたんだろう。この見た目に反して聡い中身を持っている神様ならそれぐらいはやるだろうな。一時とは言え、俺を掌で玩んだんだから。

と言つか、天国<sup>てんぐ</sup>に居た弊害だな、俺が力の察知が苦手なのは。あそこに居た奴らの力は地上<sup>こち</sup>に居る連中とは比べ物にならない所為で、地上に降りてからは感覚が狂いつ放した。コレもその内調整しておかねえと……。

と言つか、絶対気付いてやがったよな、神<sup>デミユル</sup>の野郎は。むしろアイツが気付かない訳がない。教えなかった理由は……そっちの方が楽しそう、とかなんだらうなあ。

「まっ、そうなった経緯とかも気になるけど、どうせ話してくれな

いんでしょう？」

話さないな、絶対に。長いし面倒臭いし、何よりデミウルの事を伝えるのがダルい。あんな奴の事をどうやって説明しろと言っんだ。聞かれたら困る知人ナンバーワンだぞ、アレは。

「ああ」

まあ、などと言う事は心の内に収めて、ただ頷けば、それを見て洩矢は笑う。懐が広いと言うか、何と言うか……。

「あの檻は？ただの檻じゃないんでしょう？」

能力の内容は兎も角、檻の仕掛けぐらいなら別に構わないか……と言うか、質問にはしっかり答えておかないと引き下がりそうにもないし。

「あの檻には、それを壊そうとする意思や、うちけす抜け出そうとする意思を否定する様になってるんだよ」

まあ簡単な能力の使い方だ。だが、簡単に単純故に破りがたい物でもある。それこそ、俺の能力を無視出来る様な実力、もしくは能力がないとどうにも出来ない。洩矢にもそれが分かっている様で、得心したとばかりに頷いた。そして、

「じゃあ、次だね。ねえ、どうして避けれたの？」

恐らくは一番気になっていたのであろう疑問を口にした。

「……………」

「最初の攻撃、アレは間違いなく私に出来る最高の奇襲だった。私ですら避けられない位の……。貴方がどれだけ強くても、アレを避けるのは考えられない」

……さてどうしたものか。半分神だった事はある程度予想をつけていたんだろうが、こればかりは本当に分からない様でさっきまでとは打って変わって洩矢の顔は真剣だ。

どう考えても、適当な答えは許されそうにない。とは言っても、これは別に答える訳にはいかない類の質問ではない。仕掛けを答えた所で、対処出来る様物ではないからだ。

だが、これは何と言うか、説明し辛い。何よりもそれぞれの物が……  
いや、そうだな。本家の、ある小説に登場する、灼熱の揺り籠フオウマルハウントの説明をそのまま流用させてもらうとしよう。正常な人間に近い体であつてすら、不死を謳うたう事が出来る、その理屈を。

「まあ……なんだ、要はスピードなんだよ。何かとんでもない事を経験した後、体や気分が高揚した事はないか？俺はそれを常に維持しているだけだ」

常に最悪を想定し、殺戮を夢想する。一度陥った地獄に居座り続ける。これが戦闘用の第三の思考の正体。

実の所、俺の妖怪としての性能事態スペック、脚力や体力は兎も角として、それ以外は精々中級と上級の間地点、その他は能力で誤魔化しているの過ぎない。

あの化け物デミユールと殺り合う為には猿真似もいい所だが、こう言うのに手を出すしかなかったのだ。

「例えばさ、一撃で山を砕く様な拳が回避不可な速度で迫ってくる



状況の危険度を十だとする。それに比べると、ミシヤクジに襲われるのは、俺にとって三か四程度。そりゃ避けられるさ」

行動に移す前の準備運動、弛緩した精神を引き締める心の初動。それらを常に思考においておく。一度も止まる事無く、常に最高速。相手が最高速に達する前に、自らの性能限界で迎え撃つ。

だからこそ、奇襲など通じる訳が無い。常に俺自身が奇襲を行っているのだから。

「それがあの攻撃を回避出来た仕掛け。窮地を駆け抜ける為の速さ。まあ、ちよつとした精神論だよ」

「……無茶苦茶じゃない」

絞り出す様な声でそう言う洩矢の顔は、理解出来ないと言う感情で占められている。

まあ、正直言つて俺もそう思う。俺にこんな事が可能なのは、偏にマルチタスク分割思考と六千万年生きてきた経験のお蔭だろう。普通の人間がやれば間違いないく発狂物だ。

実践してこそ思うが、こんな事を元ネタでは人間がやっていると言ふから驚きを通り越して呆れる。そして、それを考えた作者がすごい。普通は考えねえよ、こんな事。

ともあれ、洩矢の質問とやらもお終いだろ。他に聞かれる様な事は俺自身にも覚えが無い、と言ふ訳で洩矢に声を掛けてみる。

「なあ、もういいか？俺、今日の宿とかも探さなくちゃいけないんだが……」

「……………」

が、反応が無い。何をしているのかと、思い視線を庭先から横にずらしてみれば。

「……………」

腕を組み、眉間に皺を寄せ何かをジッと考え込んでいる洩矢がいた。一体何を考え込んでいるかは知らないが、どうにも声が聞こえない程集中しているらしい。少々短慮かもしれないが、早めに行動に移らせてもらおう。と、言う事で、

バシッ。

「あうっ！？」

「おお……………」

額を軽めに叩いたつもりだったんだが、加減を間違えた様で中々いい音が…………いや、悪かった。悪かったから俺を睨むな。

「つつか、話し掛けても返事をしないお前が悪い」

「つつ…………あ〜う〜」

俺にそう言われると、洩矢は考え後とに集中し過ぎていた自覚はあったのか、所在無さ気に視線を彷徨わせた。まあ、別に怒っている訳でもないのだから以上何も言うつもりはないが。

それより、寢床なり何なりを探しに行く方が先決だ。今の時代、辺りが暗くなるのは早い。暗くなっても困りはしないが、獣類の相手は些か面倒ではある。

「で、俺はもう行っていいか？」

縁側から下りて、地面に立つ。暫く座りっぱなしだった所為か、腰を伸ばすとパキパキと小気味良い骨の音が聞こえた。俺も歳かなあ。  
……あ、俺六千万歳じゃん。

「あれ？何か用事でもあるの？」

若干赤くなってしまった額を摩りながら、洩矢は不思議そうな顔を俺に向けてくる。

「寝床探したよ。もう暫くもすれば暗くなるからな」

「あゝ、そつか。そうだね……」

と、俺の答えを聞いてまた洩矢が俯いて何やら考え始めてしまった。良からぬ事じゃなければいいが……どうも、期待は出来そうにない。

「……ねえ、また絵は書きに来るんでしょ？」

今度は早めに結論が出た様で、顔を上げた洩矢が俺にそう尋ねてくる。まあ確かに、そう言う予定ではあったが……それがどうかしたんだろうか。

「なら、うちに泊まればいいよ……！」

「……………」

満面の笑顔でそれがいい、それがいいと言っている少女を前に、俺は完全に動きを停止していた。

（今、コイツは何て言った？うちに泊める？俺を？と言つか妖怪を？神社に？コイツ、正気か？）

疑問符が飛び交う思考を放棄し、新たな思考を打ち立てる。

洩矢の提案は、確かに俺としては願ったり叶ったりだ。一々寢床を  
探す必要も無ければ、すぐに神社を書く事も出来る。だが

「俺、妖怪だぞ？ミシャグジから文句は出ないのか？」

そう、それが唯一の懸念だ。

流石に俺を泊めた所為で内輪揉めなんて言うのは気分が悪い。洩矢が神らしくないのは、まあ、俺を境内に自ら招いた事で十分かっているし、コイツが良いと言えば、神社に泊まるくらいはいいのだろう。だが、コイツに従っているミシャグジ共は違う。そう思っている心配だったのだが……。

「私が出させる訳無いでしょ？」

その心配を、洩矢はたった一言でぶった切りやがった。

どうやら、洩矢は結構な暴君の様だ。ミシャグジが泣いてないといけど……まあ、そこまで自信満々に言うのなら、

「暫く、厄介になります」

そう言つて、家主に頭を下げた。……どうやら、暫くは寢床の心配はしなくて済みそうだ。

「でも、結局俺を泊めようと思ったのって暇潰しだろ？」

「ギクッ」

「そんなに暇なら信者の方に時間掛けるよ……」

「あーうー……あつ！でも、息抜きって必要でしょ？」

「あつ、て何だよ、あつ、て。つつか、お前今日一日ずっと俺とい  
たじゃん」

「あつっ！……いいの！！神様なんだから！！」

「……そうですか」

その後、二人の間でこんなやり取りがあったとか無かったとか。ついでに、会話の中で妖始が名乗っておらず、それについてまた一悶着あったのは別の話だったり、そうでなかったり。



## 狼と祟り神。実は幼女（後書き）

OK。何も言うな。分かっている。その冷めた視線だけで読者諸君が何を言いたいかはよく分かっている。だけど自重はしない！！さて、という事で原作キャラ一発目。洩矢諏訪子さんでした。この洩矢つてのが一発じゃ変換できなくて面倒極まりない。

じゃ、今回の簡単な解説を。

・何か妖始が絵を描き始めた。

まあ、そりゃウリエルとかもいるしやり始めてもおかしくないでしょう。まあ、作者がそこまで詳しい訳じゃないんで細かい描写は出てきませんが。

・神格化してる

これは今度説明。具体的に言えば諏訪大戦辺り。

・DDDネタ

作者が好きだから。特に日守秋星が好き。火鉈も好きだけど。2巻の「待たせたな、シンカー」の部分で毎回泣きそうになる。

・「文句は出させない」

ミシャクジ涙目（笑）

他に質問疑問誤字脱字、感想がありましたら是非とも。いや、正直感想とかがないと思うわれてるかが不安で不安で。あ、アドヴァイスとかも是非。でも叩きは止めて欲しかったり。

ではまた次回。

## 狼と祟り神。その日常（前書き）

更新遅れてすいません!!

約二ヶ月放置か……何やってんだ俺……。

あ、後書きでちよつと報告が。

七月二十日、幾つか表現方法を改変。



## 狼と祟り神。その日常

朝、小鳥の囀りなげと部屋に流れ込む冷気で目が覚めた。

季節は既に冬。この時代では珍しく木造であるこの『洩矢神社』だが、むしろ木造である為に非常に寒い。

一応、獣の皮で作られた布団もあるのだが、それでも寒い。保温性とかもあるはずなのに……。

生地が薄い所為か？まさかこんな所で羽毛布団の有り難味を感じるとは思わなかったが、今度能力で作ってみるのもいいかもしれない。普通の作り方？そんなもん知る訳無いだろう。

とは言え、それでも布団に包まったまま出る気が全く起きないのは、獣の皮だとしても布団の魔力は健在だと言う事か。冬場の布団、炬燵ほど恐ろしい物はないな……。

だが、俺は時代が違えばN E E Tと呼ばれる男、布団の魔力なんぞ恐るるに足らず！！

と言う訳でもう一眠り

。

「何バカな事考えてんのさ。朝ご飯出来たから起きなよ」

しようとした所で、部屋の横開きの扉を開けて、奇妙な帽子を被った金髪の少女が入ってきた。

「……こんな事に神通力なんぞ使うなよ」

と、言いつつ布団の中に頭ごと潜り込むが、起きろ起きろー、と言う少女に布団を持って行かれてしまう。

この少女、名を洩矢諏訪子もじやすわこと言い、この神社に祀られている神にして現在の日本において最大の信仰を誇るミシャグジ 岩や木を依り代とする白蛇の姿をした神 の支配者である。

見た目はただの金髪の少女だが、実際には既に数百はとうに越している合法ロリ。おっきなお友達の夢が今ここに……！！

「……寒い」

そして何よりも下らない。何だよ、おっきなお友達つて。……布団も引き剥がされてしまった事だし、いい加減起きるとしよう。正直言えばまだ眠いんだが……と、そんな事を心の中でばやきながらも、むくりと体を起こしガリガリ頭を掻いて欠伸<sup>あくび</sup>を一つ。

「……おはよう」

「うん、おはよう」

そして日本人にとって馴染み深い挨拶を交わして、今日も一日が始まる。

俺が洩矢諏訪子と出会い、『洩矢神社』の世話に為り始めてから十数年。

そう、十数年だ。どう考えても俺みたいな奴が絵を描くのには掛ける時間じゃないし、俺もこんなに長い事世話になる積もりは欠片もなかった。

なのに、何故かまだここにいます。ここに馴染んでしまった、と言う

のも無い事もないが、それは、あくまで最近になって出来た理由だ。最初の頃は絵を描いたらまたすぐに旅に出るつもりだったのだが、それを事ある毎に諏訪子の奴は邪魔してきやがったのだ。絵を描き始めれば暇だの何だのと理由を付けて俺に相手させたり、逆に忙しいからと言って風祝の手伝いをさせたり……。

今思えば、諏訪子の奴はただ単純に神としての生活に退屈していたんだろう。少なくとも数百年は同じ事を続けていたんだ、幾ら神とは言え飽きてしまっても可笑しくはない。そんな中に、色々と訳ありの俺が来れば、そりゃ退屈凌ぎとしては上等だ。

まあ、その後はずるずると惰性で居座って、現在に至る、と。

「つまり全部お前の所為じゃねえか」

「あいたつ!？」

客観的に今までの事を思い返してみても、取り敢えず前を歩く少女が悪いと言う結論に至った為、感情のままに頭を引つ叩いてみた。…  
…された側からすれば理不尽以外の何物でもねえな。

「いきなり何すんのよ!！」

「いや、俺がここに来た時からの事を思い出したらつい……」

「つい!？」

「さて、今日の朝飯は何だろうな」

「うわ、普通に無視した」

まあ、こんなやり取りも初めて所か、立場が逆になったりで結構頻

繁に起こっているので互いに一々気にしやいない。諏訪子の方は内心結構根に持っていたりするのかもしれないが……祟り神だし。いや、祟り神云々は完全に偏見だけだ。

「はあ……、妖始って偶に訳分かんないよね……」

心外だ！！と言いたいが、ここでの行動を鑑みると結構思い当たる節がある所為で反論できない。と言うか、さっきの事も諏訪子にとっては十分「訳分かんない」事に分類されるだろうしなあ……うん？俺ってもしかして変人扱い？

「つつか、何度も言うが俺の朝飯は用意しなくてもいいんだぞ？別に飯食わんでも死なないんだし」

「そう言う問題じゃないよ。家族なんだから一緒にご飯食べるのは当たり前でしょ？」

俺の言葉にこつちを見もせず答える諏訪子に苦笑いが零れる。これも事ある毎に　　具体的に言えば冬や凶作の時によくやるやり取りだ。

今は年代で言えば弥生時代。

大陸から稲作が伝わり作物の保存が利く様になったとは言っても、未来に比べれば技術も未熟でその時の気候に左右され易く凶作の場合はマジで死活問題。しかも、野菜の栽培方法は未だに伝わっていない為、山や森にある木の実をそのまま食べている。

つまり、冬には食糧不足に為り易い。そんな時にまで食う必要がない俺は食わなくていいと何度も主張しているのだが、来たばかりの頃には「客人なんだから気にするな」、数年経って居着いた頃には「家族なんだから」と言って首を縦に振った例<sup>ためし</sup>がない。

家族だと言ってくれるのはありがたいんだが、妖怪を家族だと言う

神様がどこにいるんだよ。

「おはようございます、妖始さん」

その後も特に意味も無い様な話をしながら居間へ向った俺達を迎えてくれたのは、今の時代には珍しく長い髪をそのままストレートで伸ばした少女だった。

彼女の名は穂波<sup>ほなみ</sup>。顔立ちにはまだ幼さが残る物の、年の割りに落ち着いた少女であり、現在の風祝　この神社での巫女である。因みに、彼女の両親は健在で、この『洩矢神社』とはまた別の所で生活している。穂波の母親も風祝だったのだが穂波に風祝の役割を受け継がせて引退、今は旦那と二人でゆったりとした生活を送っており、此方に来るのは祭事などで忙しくなる時ぐらいだ。

「おはよ」

いつもの様に明るい穂波に、気だるげな表情のまま挨拶を返す。まあ、諏訪子が基本的に笑ってる事が多い様に、俺も普段からダルそうな表情だから別段可笑しな事もないんだがな。少し前から気になっていたんだが、諏訪子。お前、何で偶に笑い声がケロケロに変わるんだ？あれか、洩矢神が蛙つてのはそこから来てるのか？

「？どうかした？」

俺の視線に目敏く気付いた諏訪子が疑問符を浮かべて首を傾げているが、何でもねえよと簡単に返す。

実際、気になったただけだし、別にわざわざ本人に問い質す様な類の疑問でもないだろ。別に諏訪子の笑い方がケロケロになったって何かが変わる訳でもないし。

「まさか私に惚れ

」

「それはない」

「いくらなんでも即答過ぎるよね!？」

何か諏訪子がふざけた事を口に出そうとしたので、言い切る前に諏訪子の言葉を遮る。

何かジツトリとした視線を感じるが、そんな事は気にしない。気にしないっただけにしない。無視していたら諏訪子が穂波に泣き付き始めたが、それも気にしない。むしろ気にすべきは諏訪子の方だろう。主に威厳的な意味合いで。

「はいはい、そろそろ頂きましょう。折角のご飯が冷めてしまえますよ?」

だが、すぐに穂波がパンパンと手を叩きながらそう言う事によってあつさり場は沈静化。

まあいつもの悪ふざけだし、諏訪子も「そうだね」なんて言いながら平然と丸ちゃぶ台に着く。当然、さっきまでは嘔泣き。コイツがそんな事で泣く様なタマか。と言うか、さっきの会話じゃ泣く様な要素がないしな。

「じゃ、頂きます」

『頂きます』

手を合わせて言う諏訪子に倣い、俺と穂波も唱和して、箸を手に取り朝食に手を伸ばす。

本日のメニューは白米と木の実（十中八九どんぐり）の中身を簡単に燻った物。

俺がここに来た当初は白米はそのまま出されていたんだが、流石に俺が耐えられなかったので青銅器を使った簡単な飯盒<sup>はんごう</sup>で炊き方を教える事に。

何でも、諏訪子の治める地域一帯では既に広まってしまっているのか。

……米の炊き方が出来るのって、いつ位からだろう。歴史、変えちまったかもなあ。他にこのちゃぶ台とか箸とか茶碗とかも全部俺が能力で出したもんなんだが……働いているのか？歴史<sup>デミウル</sup>の修正力の奴……いや、アイツの事は敢えて気にすまい。そもそもアイツの存在自体、俺でも把握把握し切れてないんだ。地球の化身としての役割もちゃんと聞いたわけじゃないし。と言うか、アイツの事は気にするだけでHPガンガン削られていく気がするし……。

「今日って何か予定あったっけ？」

「いえ、特には……。参拝の方も、こんなに寒いと来ないでしょうね」

「だろうね。妖始は？絵でも描くの？」

「いや、今日はやらねえよ。お前が暇だと邪魔しに来るだろうし」

「何よ、それじゃいつも私が邪魔してるみたいじゃない!!」

『……………』

その通りだろうが!!と叫びたくなった気持ちを堪えているのは、どうやら俺だけでなく穂波も同じ様で、その表情は何とも言い難く

歪んでいる。いや、よく耐えたと思うよ、お互いに……。

パチ……パチ、パチ……………。

朝食の後の居間に広がる静寂。そして不意に起こる僅かな駒を打つ音。

こう言う空間は、個人的にはだが中々居心地がいい。相手に気遣う事なく自然体でいられる空間。まあ尤も、それももう少し盤面がマシな状態であれば、だが。

最近　　とは言っても既に十年近く前の話だが、俺は能力を修行がてらに無駄にフル活用し、幾つか記憶に残っていた玩具を作り出していた事があるのだが、殆どは独楽や竹馬、縄跳びなどの懐かしく、尚且つ自然の物でも代用可能な外で遊ぶ為の物で、それらは既に諏訪子が統括する地域内の人里で子供達に使われており、現在『洩矢神社』に残っているのは当時俺が作った玩具　　いや、これについては玩具と言っているのか不明だが、その中で、諏訪子の奴が偉く気に入ったソレだけだ。

パチ。

「むっ……………」

諏訪子の放つ一手に、思わず動きが止まる。全体を睨む様にして頭



の中で幾つものパターンを試すが、どれも僅か数手生き長らえるだけか……。と、言う事は、

「また俺の負けかよ……」

「アハハハ、私の勝ち……!」

まあ、そう言う事だ。

「それにしても、面白いね。この将棋って奴」

まっ、散々引つ張った挙句意外性も何もなく順当に将棋な訳だが、ここで軍人将棋辺りだと意外性があつたのか？まあ、そんなもん狙っても仕方がないんだが。

言っておくが、俺が弱い訳ではないぞ？単純に諏訪子が強いだけだ。最低でも数百年単位でやってきた俺に対して、教えてからたつたの一、二年で勝ち星を奪うとかどんな化け物だよ、ったく……。

しかも最近は連敗気味。完全に打つ時の癖やら思考を読まれまくって嫌になる。もう打つの止めようか、と思わないでもないんだが、俺自身将棋を打つのがそれなりに好きなので負けると分かっていてもやってしまう、と。

いっその事、新しいゲームでも出そうかと思わないでもないが、残

念な事に俺には囲碁のルールが分からない。ぶっちゃけ、自由度が高すぎてどうすればいいのか分かんねえんだよなあ、アレ。

そんな訳で、囲碁は除外するとして今度はチェスでも出してみようか、と考えてみたものの、結局似た様なボードゲームだと、その内連敗しだすのは目に見えているので自重。と言つかむしろ自嘲。

「さっ、もう一回やろ、もう一回」

「うへえ……」

満面の笑みで次を催促してくる諏訪子にげんなりする。

何だ、そんなに俺を負かしたいのか？ 普段の恨みか？ もつやらねえよ、ちくしょー……、なんて考えていても、負けず嫌いが祟り結局もう一局打つ羽目になるのは目に見えている。……まあ、それに、

「」

笑顔で何かのリズムを鼻歌で奏でながら、駒を列べる諏訪子を見ていると、どうにも、

（断れないよなあ……）

まあ、断れないなら仕方がない。次は精々勝たせてもらえる様に頑張らせてもらおうか……負けたくねえからな！！

「一日将棋に使っちまった……」

いや、一日中将棋指してた事は別にいいんだけどな、二桁やって勝てたのが僅か一、二回ってのが何ともなあ……。

（多分、この先将棋でアイツの優位に立てる事はないだろうなあ。

これが才能の　　と言うか、性能の差かねえ……）

そう考えて徳利とっくり　　居酒屋の熱燗で出てくる奴じゃなくて、壺に細い口が付いた様な持ち運び出きる奴　　の酒を煽る。

嫉妬だの何だのなんて感情は微塵もない。そこら辺の感情とは、まだ人間だった遠い昔に折り合いを付けている。それに、少なくとも見た目は子供である諏訪子に嫉妬するのもバカらしい話だ。

「今夜は明るいなあ……」

空を見上げれば既に月が高くまで昇り、影を照らしている。その月を眺めつつ、また徳利から酒を一口。

何やってるのかと言えば、ただの月見酒だ。

酒は能力で少しでも残っていれば増やせるし、うむ、便利便利。

母屋の縁側でやっている所為で、流石に少々寒いが……まあそれも風流って奴にしておこう。実際にはそんなもんを解する程の学は無いがな。

「誰に言つとるんだ俺は……」

自分の考えている事に自分でツツコミを入れると言う、普通のボツ

ちよりも寂しい事をしている自分に苦笑いしつつ

「もう寝たんじゃなかったのか？」

俺の隣に腰掛けた諏訪子へと声を掛けた。

「アハハ、妙に目が冴えちゃって……ちょっと付き合わせて」

コイツ、最初っから酒が目的かよ。まっ別にいいんだけどな。

ほれ、と徳利を渡してやり、徳利に口を付け中の酒を呷る諏訪子を横目に月を眺める。

交互に徳利を呷り、月を眺め、たまに一口で飲み過ぎだの何だのと騒がしくならない程度に口論して、またうだうだと文句を言い合いながら徳利を呷る様な、そんな穏やかな、俺の好きな時間。

「だから飲み過ぎなんだよ、お前は」

「幾らでも造れるんだからケチケチしないで …… クシ  
ユンッ」

と、もう数回目になる言い合いを諏訪子としていたのだが、いつもの紫の衣じゃなく寝巻き用の白い単衣の着物を着ている所為で冷えたのだろう。俺はむしろ酒で火照っている所為で涼しいぐらいなんだが、諏訪子が小さくくしゃみをした。  
寒くなったんならいい加減寝ればいいと思うんだが、それでも諏訪子が立つ様子はない。

「ったく、仕方ねえなあ……」

「おっ？」

ズルリ、と久々に尾を出し、それを諏訪子に巻いてやる。

皆忘れているかもしれないが、一応はこれでも狼。体の一部だけを妖怪化する事なんてお茶の子さいさいですよ、ハッハッハ。

と言うか、最近ご無沙汰だった所為で言い忘れていたかもしれないが、この尻尾、かなり使い勝手がいい。

まだ狼の姿のみだった頃には単純に長く、木でも切り倒す様な強度を持つと言っただけだったのだが、人型になってからは、長さは自由自在、更には籠めた力によって刺突や斬撃まで繰り出せる様になったり、と非常に便利な武器の一つになっているのだが……うん、武器無しだと尻尾の攻撃力が一番高いつて言うのも我ながら中々おかしな事になってるなあ。

「あゝうゝ、妖始の尻尾温かいね」

「よかったな、そりゃ」

俺の尾に頬擦りしながら顔を綻ばせる諏訪子に適当に返事をしながら、また徳利に口を付ける。

（まあ、たまにはこんな風に終わる日もあっていいだろう。どうせ、すぐに忙しくなるんだし……）

そう思いながら空を見上げると、綺麗な満月が、相変わらず俺達を優しく照らしていた。そしてこれから僅か数年後、本当に危機が訪れるのだが、今の俺はそんな事を知る由もない事である。



## 狼と祟り神。その日常（後書き）

ほのぼのって言うよりもダラダラって感じがする妖始と諏訪子の日常編でしたwww

諏訪子フラグは立ってないよー。間接キスとか気にしてないよー。

それと報告。

暫く小説の更新が今以上に遅くなります。

理由としては、現在作者は高校三年生でして。いい加減勉強しなきゃなんなー、と。現実逃避にチヨコチヨコと書いていく予定ですが、それでもこれ以上遅筆になるのは目に見えていたんで、報告を。

感想、誤字脱字、批評批判、アドバイスなど、どんどんお寄せ下さい。それが作者の糧になります。

それでは、また次回ノシ

## 狼と祟り神。対峙するは軍神（前書き）

一ヶ月オーバー……うわぁ……。

### おわび

約二話ほど前で主人公のスキルの一つとしてDDDの日守秋星の精神論を使いましたが、不愉快に感じたDDDファンの方もいます。申し訳ありません。作者もDDDファンとして使った事を後悔しております。

ですが、かなり重要な設定として使ってしまったのでいまさら変更する訳にもいかなくなり……。

ですが、せめてもの償いとして、今後この作品にDDDの設定が使われていた事が汚点にならないよう、さらに読者様が不愉快を感じない様精進させていただきますので、どうかご容赦ください。



## 狼と祟り神。対峙するは軍神

『高天原の神が信仰を広げている』

そんな話を聞いたのは、つい最近の事だった。

それを聞いた時、最初に「やはり来たか」と顔を顰め、そして「こんなに長居するつもり無かったのにな」と苦笑い。

高天原の神が日本で広がりだしたと言う事はそろそろ三世紀、つまりは古墳時代。そして『倭国の王』を中心とした『ヤマト王権』の始まり。

高天原の神 言うならば、それは『日本神話』に登場する神々だ。

五柱の神からなる別天津神、その名の通り七代の神、神世七代、最後に伊弉諾尊と伊弉冉尊。それらの神が高天原で生まれたとされる『天地開闢』。そして伊弉諾尊と伊弉冉尊による『国産み』と『神産み』。

大凡、この二つの出来事から始まったとされる神話。それが『古事記』、『日本書紀』に掲載されている『日本神話』だ。

中でも、天照大神、月読命、素戔嗚尊の三柱の名や、天照大神が引き籠もった『天岩戸』は未来でも知らない奴は中々いないだろう。

厨二病患者なんかは特に。

そして、未来で言う所の奈良県から『ヤマト王権』の支配と共に広まりだした新たな神の信仰は爆発的な勢いで勢力を広げていき、俺達のいる諏訪地方 長野県まで迫ってくるのに然程時間は掛からなかった。

そもそも、俺の知る限り諏訪の地に祀られているのは軍神、農耕神、狩猟神、さらには風神として信仰されていた『建御名方神』だった。それに臆気にはあるが、どこかの伝承でも諏訪の洩矢神は侵略を受けて敗北した、と書かれていると聞いた覚えがある。

と言う事は、遅かれ早かれ、諏訪の地に攻め込んでくる事になるだろう。

「で？わざわざ何の用だ、洩矢」

と言うか、今日の前にその神の内の一柱がいたりするんだが……それも物凄く特徴的な奴が。

紫がかったショートボブ（にしては豪くボリュームがある）の髪と言い、首元に掛けたた鏡と言葉では表現し辛い装飾が施された半袖の赤い衣とその下に着ているらしい長袖の白い着物？と言い、さらには赤みを帯びた黒色の袴と言い、今まであった事のある人外

主に悪魔や諏訪子を含めた神々はどういつもこいつも時代にあつていない奇妙な格好をしていたが、目の前にいる人物はその中でも格別だ。今まで言葉に困る事はあっても、表現出来ないなんて事はなかったと言うのに……。

「そんなの聞かなくても分かるでしょ、八坂<sup>やさか</sup>」

現在の状況説明。

広間の様な所の真ん中で座る諏訪子。

その諏訪子の左斜め後に控える様に座っている俺。

そして俺達の前で偉そうに頬杖突きながら胡坐を掻いている奇妙な格好の女性、『八坂』  
『八坂神奈子<sup>かなこ</sup>』。

さらに壁際には俺達を取り囲む様に数十の神々がズラリ。

簡単に言えば敵陣と真ん中。戦力は俺と諏訪子。向こうは『八坂』  
+その他大勢の神の皆さん。

……普通に考えると無理ゲーじゃねえか？いや、ここからならいつでも逃げ出せる自信ならあるぞ？それでも、せめてミシャグジは連れて来いや。

そう思つてここに来る前に聞いた所、「妖始がいればどうにかなる

でしょ、壁とか」なんてありがたい言葉を頂き、お礼に引つ叩いたのは完全な余談。

さて、何で俺達がそんな敵陣真っ只中にいるのか。その理由は別に難しい事でも何でもなく、とうとう諏訪の地にまで信仰を広げようとする動きを見せ始めた高天原の神々と不可侵条約の様な物を結びにきたのだ。様な、って言うのは単純にこの時代にはまだ条約なんて言葉が無いからで、特に深い意味は無い。

と言うか、『建御名方神』たけみなかたのかみじゃないんだな、名前。まあ、女って言うのは予想してたよ。洩矢も女だったし。

「私達は貴方には手を出さない。だから私達にも手を出さないで」

俺達　　と言うか、諏訪子の言い分はただこれだけ。諏訪子の奴もこれ以上信仰を広げるつもりは無いらしく、それ以上に神々の争いに信者達を巻き込む訳にはいかない、だそうだ。

まあ、諏訪子クラスの神同士がマジでぶつかれば、その被害は計り知れない。故に、諏訪子の判断は一土着神としては決して間違った物では無いし、むしろ正しい物だと思う。

「断る」

それを、八坂はにべも無く切り捨てた。

「何故……!!」

「何故? そんな事も分からないか洩矢。そんな物、こちらに利点が無いからに決まっているだろうに」

諏訪子がいきり立つのも気にせず、八坂は呆れた様に言い放った。だが、それこそ何故だ。

少なくとも、諏訪子の勢力は今の日本では間違いなくトップクラス。そんな諏訪子との不可侵条約。それを呑みさえすれば、一番厄介な相手と敵対する事無く日本全土に信仰を広げられる事になる。普通ならば、これは十分な利点となるはずだと言うのに、それを断つて諏訪子の率いるミシャグジ信仰と争う利点……ダメだ、思い付かん。そもそも、俺はこう言う交渉事に関しては素人もいい所、思い付かなくても仕方ないだろう。だが、それなりの場数を踏んで来たはずの諏訪子までもが俺と同じ様に露骨に顔を顰めてしまっているとは……八坂の奴、一体どう言う了見だ？

「ふん、高<sup>たか</sup>が知れるな洩矢。いや、妖怪とつるんでいる時点で既に、か？」

ニヤリと口の端を上げた八坂の言葉に、周りの神々から嘲笑が漏れるが、諏訪子にそれを気にした様子はない。あくまでも冷静に、八坂の真意を読み取ろうとしている。

一応、俺がここにいるのは高天原の情報収集<sup>おこな</sup>を行っていた穂波に、諏訪子のストッパーの役割を任されたって言うのもあるんだが、この分なら必要なかったんじゃないかなと思う。と言うか、むしろ付いて来た事で挑発の材料を与えてしまっている気がするんだが……。

俺がそんな事を考えていると、再び口を開いた八坂は、とんでもない事を言いやがった。

「第一、貢物も無しに攻め込むな、だって？随分と都合のいい事と言っじゃないか、洩矢」

『……は？』

予想だになかった言葉に、俺と諏訪子から間の抜けた声上がる。

今、八坂は何と言った？貢物？不可侵条約で、貢物だと？

「私達には洩矢を避ける理由なんてないんだ、貢物ぐらいいは当然だろう？」

極当たり前の事を、極当たり前に口にしたのだと、八坂の表情はそう物語っていた。

つまりはアレか、八坂は洩矢やミシャグジ信仰なんかは眼中にないと、そう言っているのか？

（ハッ、分からねえ訳だ……）

そもそもの前提からして間違っている。

今回の談合、諏訪子は八坂を、穂波の集めた情報から同格、ないし僅差で自らが上だと判断して臨んでいた。

信者の量やその信仰心の密度、そして単純な戦力。それらの差はほんの些細な事で入れ替わる程僅差。戦争が長引くのは、基本的に互いの戦力が拮抗している時だと決まっている。

諏訪子のミシャグジと八坂の神の軍勢、それらが長期間ぶつかり合えばどうなるか。少なくとも、土地も民も只では済まないだろう。

そう判断したからこそ、諏訪子は八坂の元へと赴いた。おもむ不可侵条約を結ぶ為に。

だが、八坂達は違う。彼女等は諏訪子は取るに足らない格下と判断した。その判断が調査した上でのものなのか、それとも今まで土着神を侵略し、下してきたが故の慢心なのか……いずれにせよ、八坂達は完全にこちらを嘗めているのは間違い無い。

ブチリ。

その時、何かが切れる音がした。それも、俺からじゃなく、諏訪子

から。

いや、そもそも諏訪子が今まで八坂の言葉に何の反応も示さなかったのは、それが挑発だと思っていたからと言う部分が多い。自分が自分を怒らせる為の言葉だと、そう思っていたからこそ、諏訪子は冷静に耐えていた。

だが、それが全て本心で、本気で虚仮こげにされていたのなら、そしてそれを理解したとしたら。

ゾワリ、と諏訪子を中心に不可視の力が広がっていく。

（ そりゃブチ切れるよなあ！！ ）

恨むぞ八坂、面倒な事してくれやがって……！！

心の中で舌打ちする俺を余所に、深海にいる様な重苦しい空気が蔓延し、静かに、だが明確な怒りを伴った祟り神の禍々しい神力が場を侵食していく。

いや、神力の方はあくまでも意識している訳じゃなくて無意識に漏れ出しているだけ 　　って、それどころじゃねえな。

壁際に座っていた奴等の殆どは諏訪子から漏れ出した力に完全に腰を抜かす、もしくは気を失いかけている始末。その点、僅かに瞠目しただけの八坂は流石と言えるが……と言つか、こんな中で平然としてる奴の方がよっぽどおかしい。

俺？どう考えてもまともじゃねえだろ。それ位は自覚してるって。と、それはさて置き、そろそろ止めないと不味いな。ここでやり合うのは色々面倒な事に……なるか？

諏訪子の神氣に中てられて殆どの神がダウンしてるからまともに動けるのはほんの数人。その程度なら一度に相手出来るし、一番の脅威だった数の暴力もなくなっているんだが……いや、それ以前にここじゃ駄目か。諏訪子の奴、今回はあくまでも会談だって言ってる手も持ってる来てない。

少なくとも、俺は最初からこの一件の回避は無理だろうと思ってい

た。そりやそうだ、俺が洩矢神社にいたこと以外は何一つ世界に変化が無いんだから。

幾ら諏訪子が家族同然に扱ってくれたとしても、元々部外者であり妖怪である俺は今回の一件が戦争になっても諏訪子の陣営として参加出来ないし、するべきではないと思う。そもそも、本来なら俺はここにいるべきでないとすら思っているのに。

だが、だからと言ってこのままなら負けると分かっている諏訪子を放っておける程物分りもよくない。

だから、せめてイーブン。それぐらいまでは、勝率を調整させてもらう。

（                      だから、ここでやり合ってもらっちゃ困るんだよ……！！ ）

パン、と拍手を一つ。それで諏訪子の怒りを『否定』する。

あくまでも変化しやすい一時的な感情だ、その程度なら簡単に能力で干渉出来る。……それでもあまりに感情がデカ過ぎて若干厳しかったが、取り敢えず、これで諏訪子の方は問題無い。冷静さを取り戻したからか、既に部屋に蔓延していた神力も引っ込めている。

さて、ここからは少しばかり俺の仕事だ。

素人がどこまでやれるかは分らんが、八坂が乗ってきてくれる事を祈ろう。勿論、デミウルなんかの他称神自称地球意志なんかじやなく、以前会った閻魔様辺りに。

「八坂サマ」

「……何だ妖怪」

今まで黙っていた俺が口を開いたからか、八坂の表情に僅かな猜疑心が宿る。

だがまあ、一言目から黙れなんかの言葉が無くてよかったって所か。少なくとも、話を聞く気はある様だ。

「今のを見ても、洩矢サマの評価は変わりませんか？」

俺の言葉にピクリと、僅かにだが確かに八坂の眉が動いた。

「分かっているでしょうが、洩矢サマはまだ本気じゃない。先程のはあくまで抑えていた力が漏れ出しただけ。それだけで、洩矢サマはアナタの部下の殆どを行動不能にしましたが……それでも、洩矢サマは今までアナタ達が侵略してきた十把一絡げの神々と変わりませんか？」

八坂は俺の言葉に露骨に顔を顰<sup>しか</sup>め、壁際でグロッキー状態になっている自分の部下達を一瞥してフンと鼻を鳴らすと、

「そうだな……確かに、今までの輩とは違うようだ」

「……………」

「どうした、こう言う答えが聞きたかったのではないのか妖怪」

その言葉に面食ってしまった俺に八坂がニヤリと笑うが、正直、こ  
うもあつさりと諏訪子への評価を覆すとは思ってなかった。

部下の名誉を守るためか、それとも冷静に公平な判断を下せるから  
か……どちらにしても、ただの傲慢で相手を見下す訳じゃない様だ。  
と言う事は、今までの諏訪子への態度については戦ってきた土着神  
を鑑<sup>かん</sup>みての評価だったのか。

……実はいい奴なのかも知れない、と言うも可能性が頭に浮かんだ  
が、それ以上に性格が悪そうだ。それに、もっと別の思惑だの何だ



のがあるだけかもしれないし、いくら考えてもあくまで可能性ではないので保留、今は俺のすべき事をしよう。

「だが、諏訪の地を奪う事を撤回しない、これは決定だ」

撤回してくれば楽なのに、と毅然とした態度の八坂に溜め息を吐く。まあ、流石にそちは最初から期待してなかったが。

「では……こうしませんか？ 戦闘は八坂サマと洩矢サマの一对一。勿論、規定は無し。場所は諏訪の地。互いの神に被害が出ず、どちらが上かを決めるのには、ちょうどいいと思います」

これが予め俺が考えていた策とも言えない様な策。愚策の中の愚作とも言うていい代物だ。

「話にならない」

当然、八坂からは鼻で笑われた上に切り捨てられる。だが、それは予想済み。と言うか、諏訪子の要求すら通らなかったのに、こんな洩矢陣営にしか利点がない様な要求が通るだなんて思っちゃいない。

「そうですか？ 八坂サマの部下の神々、こんな状況で戦いになりますかね？ 元から攻め込むつもりだったんですから諏訪の地で、と言うのも可笑しな話じゃないじゃないですか。こちらとしては、ただ悪戯に地を荒されるのを避けたいだけです。それに……」

「……何だ」

「これぐらい受け入れる度量を見せてみるよ、この程度の不利、覆くつがえしてみるよ、軍神・八坂神奈子」

口八丁手八丁、戯言にすらならない屁理屈。挑発になっているかも怪しい言葉の羅列。

むちゃくちゃ言っているのは自覚しているが……悲しいかな、俺にはこの程度しか吐ける言葉がない。この時ばかりは自らの言語力の低さを憾むぞ。

「安いな」

と、俺の言葉に八坂はそう答えた。あまりにも安い挑発だと。やはり俺じゃ力不足だったか、と内心舌打ちしたい気分になりながらも、次善の策をいくつか頭の中で用意していく。

「それと、有利な状況を作り出すのも軍神の勤めだ。覚えておけ阿呆。だが」

八坂はふん、と詰まらなさ気に鼻を鳴らしたかと思えば、にやりと口の端を上げて、

「いいだろう。乗ってやるよ、その話」

俺が予想もしていなかった事を口にした。

周囲の神々が『八坂様！？』と声を上げるのも耳に入らず、俺はただ、考えを張り巡らせていた思考が停止しさせていた。それはもう見事に。

「いいじゃないか、望み通り真正面から潰してあげるよ」

神様は願いを叶えるものだろう？

八坂はそう言つて、さらに深い笑みを作る。

その言葉は、自らの力への絶対的な自信か、はたまた先ほどの一件から諏訪子の力を推測した上での判断故か……。

いや、どんな理由であれ、話を呑んだ事には変わらない。

（ああ、確かにアンタは諏訪子と同じで並じゃねえよ、八坂……）

今はただ、明らかに自分が不利になると分かっているが、話を呑んでくれた八坂に心の中で敬意を表しつつ、最後に、

「三日後、洩矢神社だ。そこにアンタと諏訪子の戦場を用意しておく」

「いいだろう、精々回りに被害が出ない様に神様にでも祈っておきな、妖怪」

その言葉を交わし、俺と、それに合わせた諏訪子は席を立ち、その場を後にするのだった。

## 狼と祟り神。対峙するは軍神（後書き）

超難産www原作キャラとの会話超キツイすwww

神奈子様の会話は風神録魔理沙ルートを参考にしました。と言うか、カッコよくなりすぎて作者がビックリwww

そして主人公凡人化。いや、正確には最初から凡人です。戦闘スペックと能力以外は基本的に凡人。作者基準の凡人なので違和感を感じず方はいらっしゃるかもしれませんが、こればかりはどうしようも……。以前、感想で弱くなった、と指摘され、そんな事ありませんよと答えたのですが、申し訳ありません。前言撤回、能力などの細かい独自設定でどう考えても改定前より弱体化しております。それらの設定も、また次回あたりで。

そして後半諏訪子様が空気になってしまつて反省。でも次回見せ場あるよ！主に諏訪子様と神奈子様！！主人公？ああ、そのうちあるんじゃないけどwww

と言う事で、謝つてばかりの一話でした。また次回ノシ

狼と祟り神。 決戦前夜の晩餐（前書き）

真面目に書いて一ヶ月オーバーwwwやっぱり会話文は苦手ですw  
ww

## 狼と祟り神。決戦前夜の晩餐

軍神・八坂神奈子との会談から二日間、俺達

俺、諏訪子、

穂波の三人は決戦の準備の為にそれぞれ東奔西走していた。

決戦の当事者である諏訪子は奥の手の準備、その後は力を蓄える為本殿に引き籠もり、穂波は何か考えがあるのか諏訪王国を飛び回っている。

さて、そんな中で俺が何をしているかと言えば

「……これで最後だな」

ふつ、と短く息を吐くと共に手に持っている一本の刃渡り三十センチ程の小刀を突き立てる。

俺の仕事は諏訪子と八坂が全力でやり合える場所を作る事……そして、真つ白な、反りが無い諸刃の刀身に、鏝も付けない質素なデザインそれの小刀を設置していくのが結界を張る為の準備。

今俺がいる洩矢神社の裏に広がる森には、巨大な円を描く様にして小刀を等間隔に設置されている。

この刀の刀身、大昔に抜けた俺の牙を削り出して加工した物であり、長い時間を経て『固定』と言う概念による概念武装になっている。犬歯から削り出した、小刀の刃渡りをメートル前後まで伸ばした様な剣が『斬る』に特化している辺り、恐らく歯としての役割がそのまま出ているんだと思うが、今回その中でも犬歯を除いた刀

総数三十八本、それら全てを使用して結界を展開する。

結界には霊力を使う……と言うか、それ以外に結界として活用できる力がねえんだよ、残念な事に。

それぞれの力には特性がある。共通点と言えば精々圧縮してそのまま打ち出せる程度。

妖力はもっぱら五行や四大元素に変換したり幻術などによる妖術、

霊力や妖力の上位交換たる神力なら使い方次第で結界も張れるが、純粋な神と言う訳でも今も尚信仰を受けている訳でもない俺は、一度使ってしまうと霊力や妖力と違って消費した分を回復する事がない……それで、他二つと比べると些いさやか密度や量に不安があるが、道具を媒体にして術を発動させる事が出来る霊力を使わざるを得なくなってしまうた。

尤も、刀を設置するのはその密度や量を補う為で、刀の一本一本に前々から 具体的に言えば数千万年前ぐらいから、霊力を溜め込んでいたのだが……まあ、そんな事をしていたのも、大昔にデミュウルが、

『こんな事もあるつかと、って感じでやっとかとええで！備えあれば憂い無しや！！』

なんて事をぬかしてたからなんだが、アイツ絶対にこの事見越してたよな。またか？またアカシックレコードか？……って、今はアイツの事はどうでもいい、先に結界だ。

今回の結界、刀で描いた円を霊力を流すラインとして『固定』、そこに霊力を流し込んで円状の結界として形を『固定』する事により、枠組みである円に沿って外と中を力尽くで物理的、霊的に遮断する仕組みになっている。ついでに、俺の能力による概念操作で結界自体を補強、刀に溜め込んでいる霊力は保険として結界が壊れそうになった場合のブースター役として活用する。ブースターまで出すのは少しばかりやり過ぎ感もあるが、今回はそれぐらいしておかないと本当に結界が崩れかねない。

本当なら、俺の『肯定と否定を操る程度の能力』で結界の『崩壊』の概念だの何だのを『否定』さえすれば保険なんて必要ないんだが、残念な事に能力には限界がある。

いつかも言ったと思うが、俺の能力の本質は『世界の書き換え』。つまり自分の認識で現実を捻じ曲げる事が可能なのだ。例えば、在

るはずの無い物を『在る』と『認識』<sup>にんし</sup>する事によって、本当にそれを作り出したり、本来在る物を『無い』と『認識』<sup>ひてい</sup>する事によって消し去つたりと、本当に便利……なのだが、完璧な物なんぞこの世には無い。

能力つてのは、結局の所単純な力比べだ。どれだけ使いこなせるか熟練度と言い換えてもいいが、その一点が重要になつてくる。一見万能に見えても、使いこなせなきや意味がないだろ？

そして、相反する力がぶつかり合った時、強い方が勝つのは当然の摂理。もう何度挑戦したかも覚えてないデミュウルへの挑戦の時、どんな概念を使つても当たらなかつたのも単純に能力の絶対値がアイツ自身よりも低かつたと言つのが原因だけあつて、そこらへんは身に染みて実感しているさ。

そして今回、結界の中でやり合うのは八坂と諏訪子……片方ならまだ兎も角、両方同時となると『死』と『老い』に回してる分以外の能力　約三割強を結界につき込んで防げるかどうか……。

いざとなれば、『死』や『老い』に回してる分も注ぎ込まなきやいけないかもなあ。正直、万が一の可能性として、八坂の部下共が暴れだす可能性もあるから、不死性は解除したくねえんだが。

こっちは八坂に、「部下を犠牲にしないで済む」って建前で一騎打ちを申し込んでるだけに、向こうに非があつたとしても殺しちゃう訳にやいかんし、いくら『第三思考』があろうとも肉体のスペックを超えて動けるって訳じゃないからなあ。いや、その為の霊力のブースターなんだし、役に立って貰わなきや困るんだが。

ああ、もう色々と面倒臭い。面倒臭いが。

「まっ、何とかなるだろ」

楽観的にも程があるが、いくら考えても未来の事なんぞ俺にやあ分からん。俺に出来る事と言えば、精々必死こいて裏方に徹する事ぐ



らいだ。なら、俺はそれをやり切るだけだ。それが、俺がここに  
いる理由でもあるんだから……。

俺はそう結論付けてゴチャゴチャと頭に広げていた思考を打ち切り  
ると、最後に設置した小刀に異常がない事を確認すると、諏訪子達  
がいるであろう母屋の方へと向け、歩き出した。

その日の夕飯は、今までにない程豪勢で、賑やかな物となった。

猪だったが、普段は祭事の時にしか出されない肉が振舞われ、三人  
共が羽目を外して      それこそ、半ば下戸である穂波ですら酒  
を啣る程。 たった三人ではあつたが、豪く賑やかで楽しく、そのあ  
まりにも楽し過ぎる夕餉は、まるで      。

「……ハッ、縁起でもねえな」

本当に縁起でもない、そう口の中で呟いて、徳利を啣った。

いつかの様に縁側で月を眺めながらの月見酒。前と違ふ所と言えば、  
酒の肴に周りで鳴く蟋蟀「こおろぎ」の聲が追加されてる事位か……。

さっきまでの嫌な考えを打ち払うかの様に、もう一度徳利を啣る。

「つと、来たか」

後ろから近付いて来る気配を感じ取った俺がそちらへ視線を向ける  
のとは同時に、

「隣、座るよ」

諏訪子はそう言つて、俺の返事も聞かないで俺のすぐ隣に腰掛けたかと思えば縁側から垂らした足をブラブラと揺らし始めた。ついでに、俺の徳利を奪つていくと言つておまけ付き。いつもの帽子は被つてないが、きつと部屋にでも置いてあるんだろう。わざわざ気にする程でもない。

「……おい」

「気にしない気にしない」

俺は半眼で諏訪子を睨み付けるが、諏訪子は何が楽しいのかケロケロと酒を飲みながら笑うばかり。……いや、いいんだけどさ、流石にそこまで傍若無人なのはどうよ。と言うか、穂波はどうした。

「布団に寝かせてきたよ。穂波つてば、相変わらず酒に弱いよね」

「普段飲まねえからなあ……」

穂波の奴、宴会で賑やかに食事を取っていた時には問題なかったのだが、諏訪子が折角だから、なんて言いながら酒を持ち出すと、早々に酔い潰れてしまった。……って、ちょっと待てよ。

「ひい、ふう、み……」

と、今日だけで消費された酒瓶の数を指折り数えながら、頭の片隅で俺が飲んだ分と諏訪子が飲んだ分を計算して……三升ぐらいか？穂波が飲んだ分は。えっと、一升が約一・八リットル程度だから……

…五・四リットル？

前言撤回。人間でそれだけ飲めりや十分普通じゃねえよ。むしろ、それ以上飲んだ上で、まだ飲もうとしている俺らもかなり異常だが……まあそこはほら、人外だからって事で一つ。

「って、いい加減返せ。一遍に飲みすぎだ」

笑顔で徳利を傾け続けていた諏訪子から徳利を奪い返してみれば、そこにはもう随分と軽くなってしまった徳利が……。

「って、マジで飲みすぎだろ！！満杯だったんだぞ！？」

そう言っても、諏訪子は何が楽しいのか笑ったまま。

(…………何を言っても無駄、かあ)

そう悟った俺は溜め息を一つと共に能力を発動して能力で徳利の中の酒を元に戻すと、再び重くなった徳利に口を付けた。

諏訪子も一頻り笑うと満足したのか、二人しかいない縁側に沈黙が訪れる。決して重苦しい物ではない、柔らかな、居心地のいい沈黙。聞こえるのは蟋蟀の鳴き声だけ。そんな中で、二人とも何も言わず、ただただ空に浮かぶ中秋の月を見上げていた。

「ごめんね」

どれほど時が経っただろうか。月を見上げたまま、ポツリと諏訪子が口を開いた。

「神同士の争いに巻き込んだじゃって。……それと」

ありがとう……。

そう言った諏訪子を横目で伺えば、月明かりに照らされたその表情は、どこまでも穏やかで、だからだろうか、どこか不安を覚える様な  
そんな形容し難い感情を胸に去来させるもので、

「……随分と、らしくねえなあ」

その感情を振り払おうと空に視線を戻しながら茶化す様に言えば、  
「かもね」なんて本当にらしくない言葉が返って来た所為で、思わず熱でもあるんじゃないだろうな、と疑ってしまった。

「……何？」

「いや熱でもあるのかと」

熱を測ろうと額に手を当ててみたが、俺の言葉を聞いた途端に口を尖らせた諏訪子に払われてしまった。

何だよ、真面目に心配してたって言うのに……分かった、分かったからそんな目で俺を見るな。

「ふん、何さ。折角私が真面目な話してたって言うのに……」

諏訪子の奴、どうにも拗ねてしまった様で、俺から徳利を奪い取ると頬を膨らませたまま一気に呷り始めてしまった。

少しばかり悪ふざけが過ぎたかなあと、そう思っただけで悪かったよ、と苦笑いしながら諏訪子の頭をポンポンと軽く叩く。身長差の所為で、俺と諏訪子が横に並ぶと座っていても頭が手を乗せるにちょうどいい具合の位置に来るのだ。いつも子供扱いするなとか何とか言っただけ振り払われるんだが、どうにも癖になってしまった様な気がする。

何と言うか、柔らかいんだよなあ、諏訪子の髪って。……癖になる？って言うのかねえ。女の子は皆こんなもんなのか……？

なんて事を考えていたのだが、気付けば今日に限って諏訪子は俺の振り払わず、頭の上に手を乗せられたまま徳利を手に大人しくしている。……マジで大丈夫か、コイツ。

「実はね、私ってあんまり戦った経験ってないのよ」

「……前に一度聞いたな、それ」

いつの祭りだったか、酒に酔った勢いで諏訪子が自分の昔話を披露してた事があったのだ。尤も、そうだった？なんて言って首を捻ってる所を見るに、当の本人である諏訪子は覚えてない様だが……。

「あー、『今の信仰の大本はミシャグジ信仰であり、洩矢は後からそのミシャグジの統率者として神格化した』、だったけ？」

もう数十年前になるだろう、うる覚えの覚束ない記憶を探り出してみれば、諏訪子がそうそう、と相槌を打つ。

どう言う経緯でそうだったかは知らないが、聞いた話によれば諏訪子はそれなりの信仰を得ていたミシャグジから統率者、と言う形で信仰を乗っ取ったそうだ。血が流れる事か否かの違いはあるだろうが、結局の所、諏訪子も今回の八坂と似た事を　　と言うよりも、神って言う種族は多少の違いはあれどやってる事は変わらないと言う事だろう。いや、もしかしたら諏訪子の場合は今回の件と違って、ミシャグジに抵抗すらさせなかったと言う点においては八坂よりもエグイのかも知れない。

「その後も、信仰は広がっていったけど戦闘になる事は少なかったし、戦闘になった時も対等とは言い難かった……。それだけミシャ

グジの信仰って言うのは大きかったのよ」

「へえ……」

それを聞いたのは初めてだな……って、以前話を聞いた時には酔ってたし、俺も話半分に聞いてたっけ。

「だから、私と対等の相手　　負けるかもしれない相手って、初めてなんだよ」

そう言っつて、僅かにだが確かに表情を曇らせる諏訪子を、意外だと思った。

コイツでも、こんな表情をするんだと。

コイツでも、不安を感じる様な事があるんだと。

そんな顔をしている諏訪子を見ていた俺は、気付けば、えいっと言う気の抜ける掛け声と共に、

諏訪子の頭に乗せていた右手で、その頭を叩いていた。

「あっつ?!」

いきなりの攻撃に虚を突かれた諏訪子は、頭だけでなく上半身毎のめり掛けてしまった様で、手をワタワタと動かしどうにか地面に落ちるのだけは回避して、ホッと一息を吐いたかと思えば、すぐさま俺に向かって、何するんの!と頬を膨らませて分かり易く怒ってるぞと言う視線を寄越す諏訪子に、そっちの方がらしく見えるのはどうなんだろうなあ、と苦笑いしつつも口を開く。

「何弱気になっつてんだ、らしくもない」

「むっ」

フンツと鼻を鳴らしながらそう言っても、諏訪子は口を尖らせるだけで何も言わない。どうも、本人も自覚はしていたらしい。

まあ、今までに経験した事もない様な大一番。それも対等かそれ以上の相手との命のやり取りだし、不安を感じるのも当然の事だろうが……まあ出来る事をやるって言う方針は変わらないし、そう言う不安を取り除くのも友人の役目って事で一つ。あー、こつ言う頭使うのは苦手なんだが……。

「諏訪子、お前は何だ。洩矢の祭神、ミシヤグジの支配者だろ。何を弱気になってやがる。自信を持てよ、お前は間違いなく土着神の頂点なんだからよ。……それに、いざとなれば」

「いざとなれば？」

俺はそこで一度言葉を切ると、手に持っている徳利に口を付て一口。どこか期待している様な視線を俺に向けつつ、言葉の続きを気に掛けている諏訪子に、ニヤリと口角を上げて精一杯の決め顔で、

「いざとなれば、穂波が何とかしてくれるだろ」

「……………」

沈黙は何よりも雄弁である、そんな言葉を今以上に実感した事はないんじゃないだろうか。と言うか、視線が物凄く冷たく感じるのは気のせいだと思っていたんだが……何だよ、その半眼は。

「いや普通さ、こう言う時って『俺が何とかしてやる』って言うものじゃないの？」

どこでそんな知識を付けて来たのかは知らんが　　って、俺だっけ、そう言うの教えたのは。でもそう言う台詞よりも、こっちの方が俺らしいと思うんだが。

「駄目な方向で凄く合ってると思うよ」

……あー、不味いな、どうも言葉と視線に棘がある。そんなにお気に召さなかったんだろうか。と言うか、元気付け様として不機嫌にしてみよう辺りにも俺らしさが出ている気がする。全く必要は無いが。

「まあ、最初から妖始なんか頼る気なんてないけど」

諏訪子は軽く溜め息を吐きながらそう言うと、裸足のまま地面に足を付けた。そしてゆっくりと。足元確かめる様に、思わず目を細めてしまう程の月明かりの下で、広く、僅かに花が咲いているだけの殺風景とも言える神社の庭の土に、足跡を残しながら、歩みを進めていく。

何となくではあるが、さっきまでとは諏訪子の雰囲気が変わっている気がする。その所為でどうにも声を掛け難かったのだが、ちょうど諏訪子が庭の中程で立ち止まった。

「諏訪子？」



それを皮切りに声を掛けようと名前を呼ぶが、当の諏訪子は何も答えず月を見上げている。

いつの間にか虫の声も止まり、俺達二人　　いや、俺が一方的に感じているだけだろうが、何とも形容し辛い沈黙が流れていく。諏訪子との沈黙程度、普段なら何ともないのだが、今の様に諏訪子は何をしたいのかわからない様な時なんかには、僅かにだが、どうしても居心地悪さを感じてしまう。

「うん

」

月を見上げたまま、何かを決めた様に　　ともすれば、腹を括った様に一度頷けば、ふわりと短めのスカートを翻しながら振り返る。

「　　大丈夫だよ、絶対勝つから」

その時の諏訪子の表情には、陰りなんて物は存在せず、いつもの様に　　否、いつも以上に自信に満ちていて。もはや、何の憂いもないと言つかの様に、柔らく微笑んでいた。月明かりを背に佇む諏訪子は、その夜空に映える金色の髪も合わせ、まるで一枚の絵画の様な美しさで。

例え、結果が敗北だと分かっているても信じたいと、そう思わせるには十分で……。

「　　ああ、信じてるよ」

俺は今度こそ、間違いなく精一杯の決め顔で、そう答えるのだった。

「ふう……」

徳利から口を離して一息吐く。

今、この縁側にいるのは俺一人だけ。諏訪子はいさつき寝ると言  
って部屋に戻ったし、今頃は既に床に就いている事だろう。

そして一人になった今、考える事はやはり明日の事だった。

今回の一件、万が一がないとも言えないが、恐らくではあるが諏訪  
子は負けるだろう。俺が関わらない以上、そこに不確定要素は一切  
ない。一度辿った道をなぞって行くだけになるだろうと思う。

頭の片隅にあるのは、昼間に穂波に聞かされたいくつかの保険の中  
の一つ。敗北を条件とした、諏訪子の生存の為に準備し  
たらしい保険とも言えないお粗末な案。何せ敗北したにも関わらず  
生存させる為の策だ、上手く行けば多くの利が得られるが、確率は  
限りなく低い様に思える……って言っても、協力はするけど。一応、  
俺にも仕事があるみたいだし。

万が一が起きず、諏訪子が敗北する事になれば。

（まあ、その時は命ぐらい賭けるか……）

本来なら吹けば飛ぶ様な軽い人間の命だが、折角不死の体とセット  
なんだ。友人の為に使うのも、悪くないだろ。穂波の策だって、死  
に物狂いでお膳立てしてやる。それでも上手く行かなかつたら、諏

訪子や穂波を連れて他国に逃げるのもいいだろう。それぐらいはやつてのけて見せるさ。

「まあ長い付き合いの友人の為だ、多少の無茶も、偶にはいいだろう……」

縁側に腰掛けたままだが、諏訪子がそうした様に、月を見上げる。腹は括った。後はなるようになるだろうと、再び徳利に口を付けた。

夜が明ける。さあ、幾度となく繰り返されても結果の変わらない出来レースの幕開けだ。  
。

## 狼と祟り神。決戦前夜の晩餐（後書き）

さて、前回の予告をぶった切ってまたもや丸々一話説明文や会話文だらけでございます。上手い人ならもつと綺麗に説明文を盛り込むんだろーなー、と自分の力量のなさを嘆く羽目になった作者の目だけです。

どうしてこんなに長くなったんだろう、今回でバトル始まつてはずだったのに……。

<http://3409.mitemin.net/i31310/>

そして友人の描いてくれた妖始くん公開。友人の一存（主に面倒臭いと言う理由）でちょこちょこ変更されてますが、大体こんな感じ。まあ顔は怖すぎるけどwww

次回、と言うか今回の最後辺りから作者の中二病が炸裂。

じゃ、感想や質問、アドヴァイスがあればお気軽にどうぞ。勉強しろっていうツツコミは無粋だー！！

### 《一度限りの次回予告》

幕を開けよう。それは何度繰り返しても結果の変わらない出来レースだが、それは何よりも心躍る出来レースだ。何度でも見たくなる演劇の様に。何度でも見たくなる小説の様に。

最高の見せ場で最高の殺陣を。脇役は舞台袖へ。

並び立つは二人。方や土着神の頂点たる祟り神。方や勢力を爆発的に伸ばしている軍神。

これより先、二人の間に入る者はいない。

ラストに相応しく、華々しく飾って魅せよう。

……あれ、これって逆に自分でハードル上げてないか？  
……き、期待せずにお待ちください！！

## 崇り神と風神。始まる大戦。狼は蚊帳の外（前）（前書き）

長くなりそうだったし、もう一ヶ月放置しちゃってるんで投稿。

暇潰しにツイッターとやらを始めたはいいものの、特に使い道が思い浮かばず。登録その物が暇潰しでした（笑）

URL: <http://twitter.com/#!/media89135>

追記。妖始の服装について一切触れてなかったのをつい忘れておりました。本編の方へ追加しておきますが、遡るのが面倒な方様にここにも載せておきます。

・ 白い広袖の着物に黒の袴。基本的には着物は襟元を緩ませており、袖に小さな黄色い羽根の装飾がしらつてある。旅人の守護天使であるラファエルの加護が施されているが、残念な事に効果は無い。足は素足に底に鉄板を仕込んだ下駄。

崇り神と風神。始まる大戦。狼は蚊帳の外（前）

日は既に高く南中に近付き始めた頃、彼女は現れた。数十に及ぶ部下達を引き攣れて飛行し、威風堂々と胸を張りながら、彼女

八坂神奈子は洩矢神社へと現れた。

三日前に会い見えた時と変わらず、俺の貧弱な語彙じゃ説明の仕様が無い奇抜な髪形と服装。そして、以前には無かったはずの、まるで軍艦の砲台かと見紛う様に背負った四本の六角柱。その一本一本を形作っている、あまりにも膨大な神力が触れている訳でもないのにチリチリと俺の肌を焦がす。神力の浄化作用は俺が物ノ怪もののけに属するが故なのだが、それでも離れている相手まで浄化する程の神力なんて言う物は類を見ないの言うまでもない。

本来ならその柱の背負い方などはツツコミ所なのかも知れないが、残念ながら今回は俺の出番もおふざけも無しだ。まあそれでも言わせて貰えるならば、

「おせ遅え！！」

「それは時間を指定しなかったそちらだろうが。私を知る物が」

はい、全く以ってその通り。全部時間の指定を忘れていた俺の落ち度であるのだが……まさか昼前に来るとは思わなかったんだよ。夜明けから待ち続けてぐったりだぞ畜生。

はあ、と溜め息を一つ吐いて頭を掻きながら気持ち切り替える。ここからはマジだ。真剣と書いてマジと読むぐらいマジだ。

「洩矢は」

「こつちだ」

案内するのは当然昨日下準備を済ませておいた広大な森。既に諏訪子も待機している。

普段はそれなりの賑わいを見せているにも拘らず、今日ばかりは静寂に包まれている境内の中、人数分の足音が響く。

俺と諏訪子がよく使っていた縁側を抜けて神社の裏手に出れば、そこにあるのは境界線。結界の、内と外を隔てる俺の線。<sup>ライン</sup>

「最後に確認しておく。ここより先に進むのは八坂神奈子一人」

「ああ。他の奴等はここで見物させておくさ」

「開始の合図は特に設けない。強いて言うなら、俺が結界を張ってからだ」

「精々頑丈な物を用意しろよ、妖怪」

最後に軽口を叩く八坂に恐れは無く、そこにあるのは絶対的な自信のみ。

（さて                      ここからはテメエの仕事だぞ、諏訪子……）

願うは諏訪子の勝利。確信するは諏訪子の敗北。その矛盾する二つの思いを抱きながら、俺は八坂が境界の中に入るのを見届け、結界を張る為の靈力を線に流し込んだ。<sup>ライン</sup>



八坂神奈子が境界を越えるのと、結界が張られるのに殆どタイムラグはなかった。

妖始によって流し込まれた霊力が牙から牙へと駆け巡り、刻まれた術式に従って不可視の壁を形成するまでの間は僅かに一瞬。

その発動速度は勿論の事、三十八の牙によって『固定』される事で強度も申し分無く、それには神奈子も思わず舌を巻く程の物だ。

元より神奈子自身も、一大勢力の主神である諏訪子が何の理由も無く妖怪を手元に置くとは微塵も思っ<sup>て</sup>なかったのだが

それでも、神奈子にとっては、妖始がここまで出来ると言うのが予想外だったのだ。

確かに、妖始が膨大な妖力を隠しているのに気付いてはいた。気付いてはいたが、神奈子が感じたのはそれだけだ。

才を見抜く事は神霊にとって当たり前の技術ではあるが、その中でも少なからず自負心を持ち、それを武器の一つとしていた神奈子にとって、何の才覚も見受けられない妖始は、ただただ膨大な力を持つただけの、それに振り回される、身に合わぬ袈裟を着た凡夫にしか感じられなかった。だと言うのに、いくら補助があるとは言えこのレベルの結界を張って見せるそれは、妖始が神奈子の印象に反して、想像し難い程長い時間の中を生きてきた事を察させるのに、十分な物となりえた。

（少しばかり見誤ったが……契約を破る事はあるまい）

今はそんな事を気にしてもしようがない。そう考えて神奈子は、ならば、目の前の戦いに集中するだけだ、と眼前に広がる森を見据える。

既に神奈子の優先順位は結界を張った妖始から諏訪子へと切り替え

られている。今の所、神奈子には諏訪子が何か仕掛けた様には感じられない。

先程までの僅かな間を隙と言えるかは微妙だったが、仕掛ける機会があったのは間違いないだろうに。

（何も仕掛けて来ないのは慎重になっっているからか、それとも既に仕掛けられているが私が気付いてないだけか……）

恐らく、前者だろうと神奈子は考える。何か変化があれば、気付かない筈がない、と。

そして更に一步、森へと近付いた時

地面が沈み込んだ。

「なっ

！？」

余りに予想外の事態に神奈子は驚愕する。

泥沼に踏み込んだかの様に、右足が抵抗無くズブズブと音を立てて地面に飲み込まれ、右足を引き抜くより早くそれは瞬く間に広がり左足までも飲み込んでしまう。

八坂神奈子の勘違いはただ一つ　　そも、諏訪子には先んじて何かを仕掛けておく必要などないと言う、ただそれだけの事だ。

『坤を創造する程度の能力』。坤とは則ち『地』。無から大地を生み出し、自在に操る　　それが洩矢諏訪子の持つ、地に宿り長い間を共にしてきた土着神の頂点足り得るの能力。

彼女にとって大地は一つの例外もなく彼女の支配下であり、更にこの諏訪は彼女の箱庭だ。　　仕掛と言うのなら、常に仕掛けられている。

地を踏む振動は諏訪子に居場所を伝え、神奈子が二歩目を踏み込むと同時に地の密度を低く、そして低くなった所へ上から密度の高い地を流す　　察知も回避も出来る筈がない絶対の罫。

既に神奈子の脚は太もも辺りまで飲み込まれ僅かに動かし事すら困

難となっている。

「チツ

！！」

捕らえた獲物を更に深く地の底へと引き摺り込まんとするそれから舌打ち混じりに空へと抜け出す。踏み込みが必要となる跳躍ではなく、浮遊や飛翔の類で、洩矢神社に訪れた時と同じ様に宙へと飛ぶ。地で身動きが取れないならば空へ。それは空を飛べる者にとっては当然の思考であり、地に居座り続けるそれからの唯一の逃げ道である。故に、その考えは至極読み易く。

宙へ飛び上がった神奈子の視界に写ったのは、突き抜ける様な青の中の、シミの様に黒い、間違い無く狙い済まし用意されていた鏃やしろの如き無数の巖いわ。

そして

その全てが雨の様に降り注ぐ！！

巖は矢となり衝撃を撒き散らし、砂の粉塵が辺り一面に立ち上る。巖はどれも必殺の威力を誇る文字通り神技。だがそれでも尚、身を潜めている諏訪子は決着だとは思っていない。

確かに諏訪子の畏と巖、それらはいずれも神掛かった最高のタイミングだったが、忘れること無かれ。神奈子も諏訪子とほぼ同格、それも戦を本領とする軍神と称される神霊である事を……。

「……？」

彼女の見上げる視線の先、未だに立ち上り続けている粉塵に感じた不自然さ。

（あれ、長過ぎない……？）

既に一分近い時間が流れようとしているのに、粉塵は収まらずに宙に浮き続け

その形を、上空で球体へと変え始めた。

「　　っ」

それと同時に結界内に吹き抜ける突風。砂を巻き上げたそれから、諏訪子は顔を庇う様に袖を翳す。その風が収まり、諏訪子が腕を顔から外して見上げれば、さっきまで球体を作っていた粉塵はな

そこには、傷一つない神奈子が立っていた。何事もなかったかの様に、堂々たる様で。その体に、幾重にも重なり複雑に絡み合う風の衣を纏って。

「……………」

無言。神奈子は何も言わず、ただただ眼下に広がる森を見下ろし

僅かに、口元を緩めた。その笑みは、自分と対等以上に戦える者を見付けたが故か、はたまた別の意味があるのかそれは本人にしか分からず、それ以上理由を推測するよりも先に抑え切れずに零れた笑みはすぐに表情から消えてしまう。

神奈子は右手を無作為に突き出し、指先で小さな円を描き始める。まるで、何かをかき混ぜるかの様にゆつくりと、しかし一周、二周と、徐々に描かれる円は大きく、速くなり　　気付けば、

結界の中を風が吹いていた。不可視の壁に覆われているにも関わらず、確かに。

神奈子の指の、手の、腕の動きに合わせて、徐々に激しく、徐々に速く。

葉を揺らすだけだった微風は、木々を揺らす烈風へと姿を変え、土を巻き上げるだけだった旋風は、森を根こそぎ蹂躪する竜巻へと豹変する！！

僅かに十数秒。たったそれだけの時間で、広大な森は一掃された。根こそぎ、草すら残さず　　荒れ地へと変えられてしまった。

『乾を創造する程度の能力』。乾とは則ち『天』。天を支配するその能力は、気流だけに止まらず、天候すらも意のままであり信仰を侵略で広げてきたが故に軍神と称されるが、その本質は間違いない風神である八坂神奈子に、これ以上なく相応しい能力だと言える。

そして、その風神の猛威が存分に振るわれ荒れ地となった森のほぼ中心地。周囲のあらゆる物が存在する事を許されず吹き飛ばされた筈のそこには、いくつもの岩を積み上げて造られた酷く目立つドームの様な物体が鎮座していた。

「無茶苦茶ね、まったく……」

次いで、竜巻が消えたのを感じたのかドームを構築している岩が崩れる。中からは現れたのは当然だが、辺りを見渡して呆れた様子の諏訪子。そして空に浮かぶ神奈子を一瞥すると、すぐさま予兆無しで創造した新たな岩石を打ち出す。

大地から放たれた神奈子を撃ち抜かんと迫る岩の弾幕の前に、神奈子は動かず　　残像を作り出しながら神奈子へと一直線に疾走する岩が彼女の体を貫く直前、その軌道がぶれた。

神奈子は動けないのではなく、動かない　　動く必要が無く、一見すれば先の岩の軌道は物理法則に反した現象だが、その異常には、異常なりの法則が存在する。

確かに、諏訪子はある攻撃で仕留められるとは微塵も思っていないかった。それでも、回避されようが迎撃されようが、手傷を負わせる程度は可能な攻撃だったはずなのだ。それを無傷でやり過ごされた。

ならば、そのタネは早々に見破っておかなければならない。

放った飛礫はその法則を看破する為の　　巖を回避した神奈子の仕掛けを解き明かす為の攻撃だったのである。

「ふうん……風で軌道をずらしてるんだ。さっきのを避けたのもその風って訳ね」

「クツクツ……早いな、たった一回で見破るか」

そして、諏訪子の目論見を理解しておきながら、神奈子はあえてそれを回避せずに大人しく受けたのだ  
諏訪子を試す為に  
何度目でタネに気付く事が出来るか、それを試す為に。

「クツクツク……」

故に神奈子は笑う。諏訪子が自らの予想を裏切って僅か一回でそのタネに気付いた事に  
この相手は、全力でやってもよさそうだと。

「フフフ……」

それを受けて諏訪子も笑みを浮かべる。目の前の相手が、何の遠慮手加減もなく全力で叩き潰すべき相手だと  
初戦の相手に相応しい相手だと。

戦闘を始めて既に十数分経過して、初めて二人は真正面から対峙する。

天に住まう八坂神奈子と地に根付く洩矢諏訪子。

『乾』と『坤』      『天』と『地』。

『大和の一柱』と『土着神の頂点』      『風神』と『崇り神』。

その姿形やあり方、そのいずれをとってもあまりに対照的な二人。場を耳が痛くなる様な静寂が支配する中で、二人は互いに何も言わず、ただただ睨み合う。

双方、通常であれば既に動く所が存在を保つ事すら困難になる様な莫大な力を行使したにも関わらず、汗はおるか呼吸すらも乱してい

ない。それはつまり、あれだけの事を為しておいて、それでもこの二人にとってはただの様子見に過ぎないと言う事だ。だが、それももう終わる。既に先程のやり取りで、二人は自らの中であつたイメージと実際の戦力との誤差修正を終了した。

ならば、これ以上の様子見は不要。後は全力で相手を叩き潰すだけだ。

あまりに異常で、あまりに非常識。人智なんて物が及ぶ範囲を遥かに超える、たつた二柱の神による戦争が、始まる。

祟り神と風神。 始まる大戦。 狼は蚊帳の外（前）（後書き）

今回のお題は「三人称でどこまでバトルを描写できるか」と「原作キャラを格好良く書きたい」の二つ。

サブタイの（前？）は後どれぐらい掛かるか分からないから。さすがに（中）はないと信じたい。

文章力向上の為、感想や注意点などありましたらドンドンお寄せください。

八坂サマの能力の内容に関しては作者の妄想なのでご注意を。原作で使われた事はないんじゃないかなー。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7842n/>

---

東方否意狼

2011年11月12日23時21分発行